を連て歸り、翌日柳吉をもたづね出せしが、三日の間死してあるを、異人の看病にて蘇生をなしたる始末など、くはしく記すもわづらはしければ、大略に看官の推察を願ふのみ。かくて彼の旅僧は、神仙ともいふべき良醫なれば、家内の衆人尊敬をして、種々の事を願ひ、いろ〳〵の病を賴むに、無慾の奇人ゆゑ其良方をしへ、又因果應報の理を說き聞せけるが、柳吉は倩異人の顏を看るに、一度死せし間にめぐりし地獄の體相、蘇生の今に現然と見ゆるが如く、且思ひ出せば其身を救ひて、地獄中を連られ給ひしと見たりし地藏尊によく似たれば、心中恐るゝ程に尊み、密に其故を告げて善惡を問へば、うち笑ひて柳吉に向ひ、僧「イヤ〳〵愚僧も元來凡夫なれば、左樣な事を明らかに知る道理はござらぬ。私に聞よりは早く東に下つて其女に再會をするが、迷ひの晴る近道でござる。柳「ハヽ、成程左樣でございます。少しも早くマア婦多川へ參つて尋ねます。僧「イヤまだ直には當所を出立いたす樣には出來まい。今明日の中に亦種々談合があつて、夫からの事になるでござらう。私も少し胸に思ひ當る事があるに依て、先づ此家を立つて東の方へ參る所存だから、殊によつたら再會は彼地でいたすかも知れ申さぬ。トいふより早く身繕ひもせず、言葉ずくなに湯本を立出で、漂々として去られしかば、衆人奇異の思ひをしたりけるが、其日の夕方に果して異人の言葉の如く、上方の實右衞門も湯本へ下りてお直に異見を加へ、柳吉に理害を言聞せ萬端の相談調ひ、湯本の正右衞門の家をば親類の者に相續させる事に極り、日數立てお直を伴なひ、やがて東へ下る折からは、お君の病氣も全快しけるゆゑ、同じ道なれば瀧次郎、お時、お君、柳吉、お直、みな〳〵揃ふて湯本を立出、實右衞門には宗八を供に連れ、四五日後より志良木の店へ下り、店の用事を濟して後、柳吉お直の身上を相談に及びけるとぞ。されば お時は瀧次郎を伴ひて家に歸り、お君は彌三郎のこしらへくれたる假の家に歸り、柳吉お直は櫻川新孝の方へ落着、其世話にて是も假の住居をこしらへしが、柳吉は何事も捨置て、お直には内々にも話さず、梅吉の安否を尋んと思ひし所、道中にて足を痛め步行なりがたければ、心ならずも五六日も過せし折しも、宗八は尋ね來り、宗「イヤ名の高い人といふものはいゝものだ。新孝さんと聞たらば、直に知れました。直「ヲヤ〳〵早く來る樣になつたねへ。柳「兄さんはどうなさつたネ。宗「實右衞門樣をば店へ送りつけると、直に婦多川へまゐつて、それから此方へまはりました。直「ヤレ〳〵それは大きに御苦勞だツけネ。柳「寔に往たり來たり度々だから、さぞ御太儀であつたらう。婦多川へは何の用があつて往なさつたのだ。宗「エナニ瀧さんが此方へ出たら、是非寄つてくれろと言なさるし、またお時さんも左樣言ひなさるから、今日參りましたが、イヤあちらにも不思議な事がありました。柳「ハア何ぞあの衆の留守に間違つたことがあつ

たかネ。 宗「ヱお時さんの家内には何も不思議なことはございませんが。ト跡を言はずに話を他へちらす。 柳「ヲイお直、お前新孝で聞て、酒をさういつてくんなゝ。 宗「イヱ私ならば決しておかまひなさいますな。 直「ほんに宗八さんには種々禮をすることが有ねへ。 宗「ナニどうして中々そんな御心配は入ませぬ。トいふを聞かけお直は表へ出て行く。跡見送つて小聲になり、宗「イヤモシお前さんはまだ此地へ着て、婦多川へは一度も往はなさらないネ。 柳「さうサマアお直にも遠慮なり、足をばなやんで居るし、氣にはかゝるけれども、まだ往間がないから。 宗「成程さうでございませう。時にまア大變な事がございました。ト梅吉の幽靈赤子を秀八に賴みし怪談、その兒を彌三郎の世話にてお時の家に乳母を置て育てることまで、くはしくかたりぬ。されど彌三郎が、いかなる了管ありてか、梅吉の蘇生せしを他人にかたらざりしと見えて、その事は宗八も聞ねば物語せず。これによつて柳吉は、梅吉が死を哀れみ、悲しさやる方なく、其方の空を眺め、涙にむせるほどなりしが、宗八も俱に不便の最期を語合ひ、暫く愁ひに沈みしが、異人の言葉をうち忘れ、全く梅吉は死したる事ぞと思ひつめしゆゑ、東へ下りしことの遲くなりしを悔しきことに思へども、今はかへらぬ亡人なれば、只追福を營むの外はなし。歎きの中の樂しみは、梅吉が產し幼子の、秀八の情けによつてすこやかに生立と聞き、せめて紀念の顏形を見ることにはなるべしと、やう〳〵氣を取直して、泣顏をぬぐふ其所へ、お直は酒肴を誂へ歸り來りしゆゑ、其後は梅吉の噂もならず、其日は宗八と酒汲みかはして遊びしが、其翌日より柳吉は、風邪にて床に伏して他へ出ず、宗八は又實右衞門の用事にて上方へ登り行き、お直は未だ住なれぬ旅の心の假の宿に、思ひおもはれうれしくも、連そふ甲斐もあらずして、心細くも枕の側、 直「柳さん何ぞおたべでないかへ。 柳「インニヤ何も食べたくない。湯があつくば呑してくんな。 直「ヲヤ、お藥が出來たから、お湯よりはお藥におしなネ。 柳「アイなんでもいゝヨ。咽が乾くから早くくんな。 直「アイ、それぢやア、マアお湯を上げやう。咽のかわくのにはお藥ぢやア惡からうから。ト湯呑茶碗を洗ひ、白湯を汲でさし出し、 直「サア起して上樣かへ。 柳「ヱさうか。それぢやア少し起きて見やうかノ。 直「アヽ左樣なさいヨ。ト抱越し、白湯を呑せながら、 直「ヲヤ〳〵、大層に瘦た樣だネ。 柳「ナニ此瘦たのは病氣の爲ぢやアねへ。 、、、、、だ。 直「なぜへ。私が苦勞をさせたからかへ。 柳「ナアに苦勞は此方が心からだから構はねへが、お前の、、、、、、、いもんだから、こんなになつたのだ。ト言ひながら白湯を呑して貰ひ、 柳「此方の瘦た代りにお前は此樣に太肉たヨ。 直「ヲホ、、、、嘘ばつかり、私こそおまへさんのお蔭で、寔に、、、、、、になりましたは。しかし私きやアモウ〳〵、、、、に可愛がられたのが、何よりか嬉しい

から、死んでも本望だとぞんじます。　柳「ソレそんな可愛ことをいふから、此方が痩もしたり、太肉もしたりするのサ。それだから、、、、、だといふのだヨ。　直「ヲホ、、、をかしいねへ。アレサ、ヲヤ今日は急に氣色が能のかへ。ほんとうにさうだと嬉しいねへ。此間の様に氣味のわるい事をお言ひだと、自然に何だかこはくなつて、後の方が見られる様でございましたヨ。あの時分にはお前の目に情人や女郎衆が幾人も見えたのでございますネ。種々な名を呼だり何かをおしだから、寔にこはくもあり、苦勞でもありましたは、今日は餘程い〻様だねへ。　柳「ア、もう今の心持のやうだと、四五日の中には床に居ずともい〻様になるだらうヨ。ト若い同志の睦しさが、、、、のさはりとなりて、思ひの外に月日を越えて、他行もならねば婦多川の、小兒の事も問ずして久しく打捨て過しける。

第五篇　卷之二

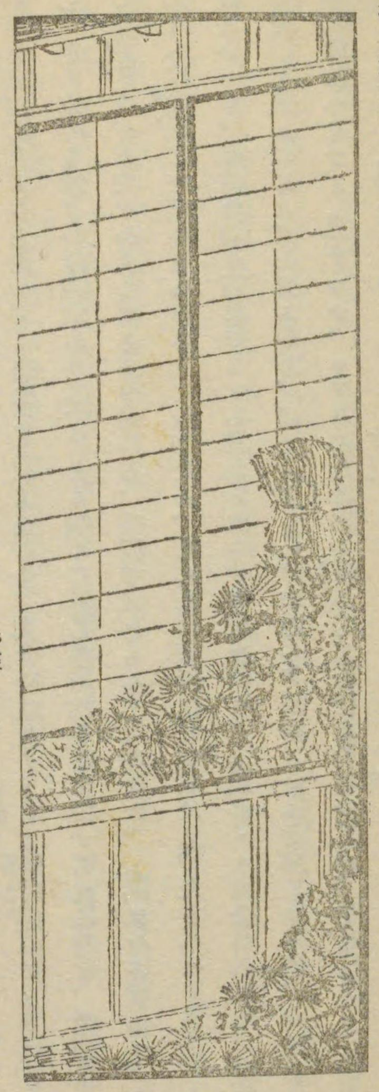
第二十七回

夫れ奇は衆人の好むところ、聖賢はこれをとらず。しかりといへども世間に理外の珍説も亦多くあり。彼梅吉の幽靈が、秀八に赤子を頼みし類ひ、いと怪しむべき所爲に似たれど、か〻る例は倭唐土の冊子にも載せて、悉く虚談とのみいはんや。されば其頃和哥町に名も秀たる秀八が、梅吉の幽靈に出會て赤子を貰ひ育てるといふ、其土地の噂はいふに及ばず、忽ち諸方へ言傳へ語り傳へて種々の虚談をまじへ仰山にはなしければ、左なくとも他人に知られ、ひねきの多き秀八がことなれば、證據なき事にもあるべからず。眼前に逢ふて其委しき譯を聞ばこそ面白き奇談なるべしと親しき疎きの隔なく、思ひ〳〵の茶屋にいたりて、彼方此方より秀八を招くこと晝夜を無差別、さればとて秀八は、生質の勇肌者ゆゑ、かへつて是を恥と思ひ、座敷に出ても其事は、ろく〳〵に物語らず。唯一通りに潤色なく話して、世間の風聴よりは一向にをもしろからねど、問來る人は彌々これを奥ゆかしく思ひ、親しきはます〳〵其氣性を賞めてひねきになし、此節の

噂に付て初めて對面なしたる者も、彼怪談を詳しく話さねば本意なきやうなれど、その美麗なる容色と藝の至り盡して、また上品を愛し、新にひねきの連中となる客人數へ難し。されば其故に主人も徳を得る事存外にて、只さへ流行嬢なりし秀八が、此程は部屋に休足する暇もなく、晝夜追々に跡を付られ、少しも保養のならざる樣なれば、主人は是を又案じ過し、我家の金箱と大切に思ふ秀八が、今の如くにては中々に身の勞れも出で病氣などの發りもせば、其節は悔んでかへらぬ所爲とならんと、折々口のかゝるを主人より斷はる程にぞいとをしみける。かゝりし程に秀八は、猶更はげみて座數を勤め、片時もはなれがたく思ふ彌三郎にも、逢ふこと稀なるゆゑ、心の底には忘るゝ間は少しもなけれど、續く座敷に間もなければ、詮方なく文を送るに、毎度やさしき返事のみにて、久しく逢ぬを聊も恨みらしく言越したる事もなく、殊に逢ひにも來らぬを、風と案じ付いて苦勞になるは、彼お時の宅へ彌三郎が、賴み置たるお君の身の上、今は先方へ引渡せしと言ひたれども、全く左樣にはあるべからず、慥に何所へか圍ひ置か、家内へ入れもせしならんと、胸を惱まし居たりしが、元來實意のあつき生質ゆゑ、戀の迷ひの其中にも、梅吉に賴まれし赤子の事は忘れる間もなく、日に幾度か案否を訪ね、又里母も心やすきものなりければ、折節部屋へ連來りて、秀八も抱せなどして遊びしが、何所にても苦界にある孃共は小兒を愛して戯れ喜ぶものなれば、毎度其兒を連來る時は、寄場中の手遊びとなりけるが、今日も彼赤子を連來りしゆゑ、化粧を仕掛りたる秀八が、膝にかゝへて左も大事さうに勞りながら、秀「ヲヤ〳〵ちよつと、コレ御覽。寢て居て笑ひ顔をするヨ。何樣したらうねへ。○「ヲヤさうかへ、可愛らしいねへ。ドレ私にちつとお抱せなネエ。△「アレサ秀さん。私に貸ておくれな。私きやアまだ今迄さツぱり抱ないヨ。今日は抱しておくれヨ。○「アレマアお待な。お前が抱くと下手だから泣はネ。△「ヲヤ〳〵意地の惡い事をお言でも、お前こそ昨日抱て泣れてお困りぢやアないか。

秀「アレサ、マア靜にしておくれヨ。おびへるといけないから。アレ御覽な今まで笑ひ顔をして居たのが、苦ひ顔をするはネ。×「ドレ〳〵私にお抱せ、私は上手だから。サア秀八さん。チツトまア此方へおよこしヨ。お前は其子よりかまだ可愛者がある癖にねへ。ト笑ひながらいふ。又傍より笑ひ顔にて、△「さうヨ〳〵。そしてそれのが今に出來るかも知れねへはネ。秀「ヲヤ否なことをお言ひでない。誰が今ツから赤子なんぞを產ものかネ。○「ヲヤそれだつても梅吉さんも餘り和合すぎたから、こんなのが出來たのだアネ。トいふ中に、赤子は目を覺して泣出す。秀「ソレ御覽な。とう〳〵起してお泣せだヨ。憎らしい。ヲヽ〳〵誰ヨ〳〵。能子だヨウ〳〵。△○「イヨ母御が立てだまかします。×「どうして〳〵。乳でなくつていけるものかネ。○「ヲヤ〳〵

乳の伯母さんは何處へか往たさうだ。はやく呼でお遣りなネエ。(秀八も流石持餘したる其所へ、里の乳の人來りて乳を呑せながら連れて歸る) △「可哀さうだねへ。梅吉さんも嘸悲しかつたらうと思ふヨ。 ○「ヲヤ梅吉さんといへば、彼嬢の跡はどうなつたねへ。そして梅吉さんの母御は則元の所に居るのかネ。 秀「イヽエ、ナニさうぢやアないヨ。何だか彌三さんも往て世話をしてお呉だがネ。死去四日目の晩に、隱密お弔ひを出してネ。其翌日梅吉さんの母人も何所へか越て往てしまつたとサ。 △「ヲヤ〳〵孫のことも何も構はないでかエ。 秀「イエ彌三さんには能く賴んで、私の方へも禮を言てよこしたのサ。ト(いろ〳〵話の其中に身仕舞するあり、引込で寢て居るもあり。出入忙しきは察し給へといふ) ×「そりやア左様と、猫次さんはどうかこじつけられたらしい咄だノ。 ○「左様か可哀さうに、新子の間は勝手が知れねへから、そんなにされても腹も立ねへようなものゝ、他所から來る人ぢやアなし、土地の者だけ面が憎いノウ。全體それを無理に執持太夫衆がわりいやアナ。 ×「ナニサそれも和十さんだの、榮次さんだの、由さんだのは、お客をも此方も大事にするから、そんなことに掛り合は仕ないけれど。 △「どうも他人に知られたものは、新子に困らせる様なことは仕ないはネ。(是は所の人も精しく知らぬ。近頃の譯なれば精しく言はず。知る人は言ずとも能く御存なれば、穴を言過ぎて尙憎まれんことを思るゝのみ) ○「それ見なゝ秀八さん。今朝おねらが言つたのが當つたらう。ト言れて秀八莞爾と笑ひ、仕掛を着かへる。是は確に兼て思ふ所より口がかゝつて出る故なるべし。



彌「ナゼあんな文をよこしたのだへ。 秀「それだつても餘り平氣に成てお出の様だものヲ。 彌「平氣だとは何のこつた。 秀「それでも此頃ぢやア何様に足が遠いか知れやアしないは。手紙を上ても返事には氣休めらしいことばツかり書ておよこしで、私にやア幾日逢ないでも用はないといふ様だものヲ。 彌「なんのつまらねへことを、また言出したぜ。今の中五日や十日逢ねへといつたつて愚痴をいふ事もねへ。此方はまた少しの間は我慢をして、少しも早く引籠せる算段が第一

だと思つて、いろ〳〵骨を折て居るのに。　秀「そりやアモウ無理はないのサ。私が何だのかだのと、餘計な世話をかけるのに、彼娘も別にして家宅をこしらへてお置だから、大概其所へ往てお遣りでなけりやアならず、また往てお在で見ると、可愛らしい娘の事だから、離れるのが少しの間もお否な筈サ。　彌「ヲヤ〳〵とんだ災難を言かけられるものだノウ。何ぼ此方が馬鹿だといつて、そんな事ばかりして居られるものか。第一金も體も左樣は續かねへはナ。此方は一人の女房を早く家内へ入ようと思つても自由にそれもならず。又當時ばり〳〵して流行嬢のことではあるし、主人方でも離すのは否だらうし、當人も網の目から手の出る樣に惜がられる身を、世帶染みて仕舞氣は、まだなか〳〵なささうだから、唯獨で氣をもんで居るはナ。　秀「ヲヤさうかへ。そんならば最初に左樣あきらめさせてお呉だと、こんなに苦勞はしないはネ。たとへモウさうだからといつて、今更お前に別れでもする樣なら生ちやア居ないヨ。　彌「エヽイ聞分のわりい。今言つたのを他人のことだと思ふのか、ばか〳〵しい。おねらアお秀といふ女房より外に、女房をもつ氣はねへはナ。　秀「アレサ、マアそんなことで紛かしてお仕まひぢやア否。今日はよく了管を極てお呉な。　彌「なんのつまらねへ。其方が腹が定らねへから、此方のことを疑ぐるのだア。そして今更そんな輕々しいことを言つたり、思つたりして居ては賴母しくねへぜ。　秀「ヲヤなぜへ。何が輕々しいのだへ。　彌「なぜぢやアねへはナ。此土地にも遊びの外に、心易い友達もあれば、異見を云つた人もありするのを自惚て居て、萬一寢返りでもされた時にやア、氣毒だが此方ア無事ではおかねへ氣で居るのに、お前は口の先で氣休めの嫉妬をやいて居てくれることもねへ。お時なんぞの前へ對しても、お前が餘程しつかりしてくれねへぢやア外聞がわりいはナ。　秀「アレサ、マア今日は何樣したンだねへ、ヲホヽヽヽ。出番の衆を見る樣だヨ。　彌「ヲヤ店者に逢たことがあつたのか。　秀「なにが悔しくつて。それだがネ、私が此間思つて居ることがあるから、お前に嘶して置がネ。必ず惡くお聞でないヨ。　彌「イヤ〳〵何だか知らねへが不承知だ。腹を立なの、惡く聞なのといふ前置のある話に、餘り嬉しい相談はねへもんだ。　秀「なぜで も、大方此節別て流行に付て、賴母しい人が出來たとか、此義理とか、此都合だとかいふ話だらうが、眞平だ。モシさうならば覺悟して言出しねへ。元はお主のお娘御でも、今ぢやア彌三郎さんの女房だア。どんなことが出來たといつて、三日とも手放すものか。ト少し腹を立たる樣子にてまじめにいへば、惚たる女の心にとりては眞に嬉しく、莞爾と笑ひ身をすり寄せ、　秀「お前もマア先くどりだねへ。私の相談をするといふのは、そんな事ぢやアないはネ。　彌「マア〳〵何だか久しく逢ずに居たらば、疑が出てならねへ。此方のことを平氣だといふが、先刻からお前の方

が落着いて平氣だア、人ぢらしな。秀「ヲホ、、、をかしいねへ。ア、アレサ、、ヨ。彌「ヱ、、いゝかげんに我儘を言ひなゝ。放逸者めへ。秀「、、、、、になるねへ〇〇障子越に聞えたるゆゑ、何かわからぬ言葉多し。宜しく察したまへ。

第二十八章

直「柳さんお前の其様なに隱してお在のことを無理に聞たがる理もないがネ。不思議な緣でこんなにマア、夫婦になつて活業て居てみれば、どうもお前の心の中に朝夕苦勞してお居でのことを、私が知らずに居る樣では、始終お互にわるいぢやアありませんか。柳「此間中折節そんなことをいふが、何もお前に隱して居ることはねへが、何を聞てさういふのだか。直「ナニネ私がこんな事を聞たがるのは、嫉妬でいふとお思ひだらうけれど、些とも左樣ではございませんヨ、隱さずに打明て話て聞せておくんなされば、また私も心に考へて居ることを、お前さんに話して、そんなに煩つたり、苦勞をしたりおしの胸を休めて上度から聞ますのサ。それだから何樣ぞ話しておくれなさいな。柳「何を隱して居るといふのだ。直「アレサ他ぢやアありません。婦多川の梅吉さんのことでございますヨ。柳「ヱヽ、誰がそんなことをおめへに話した。直「ナニ去頃から知つて居ます。それ故にお前さんも今の身におなりではございませんか。また梅吉さんも唄女の勤をして居ながら、赤子まで出産の中だから、それを捨てしまつて、私ばかり可愛がつておくんなさいましといふ樣な心は、些ともございませんヨ。トいはれて倩柳吉が考へる中に目に涙。柳「なるほど今まで隱して居ても、少しは推量をして居るだらうと、改めて話も仕なんだが、實は戀しいと思つた梅吉は、死んで仕まつて、殊に可哀さうなのは、ト

是より宗八が瀧次郎お時が方にて、聞來りし中裏の怪談をはじめ、柳吉の胤の赤子を秀八が方へ引取て、育て居る事までを、宗八に聞たる通りを物がたり、病氣全快の上は秀八の育くれる小兒を其身の方へ請取て、梅吉のかたみに側に置て、お直に育てもらひたきよしを打明て賴みければ、お直はさらに嫉妬色もなく、よろこびて、

直「最初から左樣いつてお呉だと、今までお前に餘計な心配もさせないのにねへ。それぢやアネ柳さん。お前の病氣も最早大概治つて、胸の痛いのが治ればいゝのだから、其胸のやすまる樣に、はやく梅吉さんに逢て顏を見たり、看せたりおしな。左樣すると兩方の病氣が直に平癒から。柳「ナゼそんなつまらねへことをいふだらう。梅吉は先日に死で赤子ばかり殘つて居るンだア。何を聞違へて其樣わからねへことをいふのだ。直「お前さんは情がないねへ。柳「なぜ〳〵。直「な

ぜとお言ひだけれど、私が男だと、梅吉さんの様な美しい婀娜な女に死ぬほど惚られて、小兒まで出來て御覽な、どうして別れて居ますものか。それをお前さんは移氣だから、私の様な田舍者でも當座の慰みにはなるとお思ひで、梅吉さんをば忘れた様にして差置だからサ。 柳「無理なことをいふのう。情があつてもなくツても、死だものが何様なるものかナ。 直「イヽヱ、どうもならないことがあるものかネ。たとへ死で仕まつた人でも、此方の一念で蘇生せても顏を合せられないことはございませんは。 柳「アハヽヽヽ、種々な愚智を言て、此方にからかふのたか、今日は何様か仕たのかノウ。蘇生せるの何のと京傳の著へた合卷ぢやアあるまいし、招魂の法とやらで魂を招き返して、蘇生させるにも死骸が何所の御寺にあるか知れやアしねへ。 直「ヲホヽヽヽヲヤあの合卷は御殿に在た時分見ましたが、實正に在ましたことかねへ。 柳「何様だか往昔はあつたかも知れねへが、當時になつて見ると、空言らしいことサ。 直「ヲヤ私は幼年時から小說だの合卷だのが好で見ましたがネ。西行の撰集抄とかいふ繪本にも、古骨を集めて何だか藥を付て生た人の様にする事が記てありましたは。しかも何の中納言とかいふお公家さまが西行よりか其法をよく知つてお在なさることが書てありましたは。 柳「左様か。お前は博識だから其法を讀み覺えて居るならば、何様ぞ梅吉を蘇生せて貰たいもんだ。しかし左様したら又面倒なことが出來るだらうから、最生て來ねへ方がよからうヨ。ト笑つて居れど心には、いかばかりか慙しからん。お直は少し腹を立た顏色にて、 直「これほど私が解ていふのに、何様しても嫉妬をすると思ひかねへ。左様ならお前さんの念晴しだから、今にも梅吉さんを蘇生せて連て來て、三人が同床に居て、私が嫉妬をやくか何様するか、お目にかけるヨ。さうしたらば何様おしだ。 柳「アハヽヽヽイヤハヤ何ヲあどけねへ幼年の様なことをいふのが好でも、餘りつまらねへ盡しをいふノウ。 直「イヽヱつまらない事はないヨ。お前さんが其様に馬鹿にしてお在だから、私も意地になつてお梅さんを蘇生して連て來るヨ。 柳「アヤヤ〳〵お賴み申ます。しかし今更梅吉が蘇生ても、ヲヤ誰か障子を明た様だは。 柳「ナニ〳〵誰が來るものか。ヤアその本を讀できかせなといふのに。 直「私きやアヿ否〳〵。こんな本は嫌ひでございますものを。 柳「そんならなぜ一昨夜の晩は夢中になつて讀で居たのだ。 直「ヲホヽヽヽ嘘ばつかり。ヲヤちよつと此男の顏は寔にお前さん

の顔に眞寫だは。 柳「ナニ〳〵此男より餘程能氣だものヲ。 直「ヲホ、、、大層な自慢だねへ。
柳「自慢をしても能のサ。 直「ヲヤなぜへ。 柳「なぜといふけれど、餘程男、、、こんな可愛らしい、、、、て、家藏を人にくれてしまつて、貧乏な此方と夫婦になつたのだ。サアどうだ十人並より勝れた、、、、、、かうなつたから好男に違ひはねへ。 直「ヲヤ〳〵私は美、、、、たンぢやァありませんは。 柳「そして何所に、、、だ。 直「ヱ、其やさしい信切なお心にサ。 柳「コウ〳〵此娘の顔を見な。これがおめへによく似て居るヨ。 直「どうして私が此半分にもいきますものか。ヲヤ〳〵寔に美服を着て居ますねへ、憎らしい。ト二人は餘念のなき折から、中敷居の障子の外にて、「ヱヘン〳〵。何樣だ、病氣は快かの。トいはれてお直は驚天し、 直「ヲヤ兄さん

から。 實「さうか。それでも最う顏ッ色が大きにいゝ。あゝ引こゝ久振で此方の店へ來たらば、イヤ用があつて〳〵。ちよいと此方まで樣子を見に來ることも出來なんだ。マアそれでも漸々に全快だの。 柳「ヘイ有がたう。最四五日も立ましたら、表へ出て用も足され樣かとぞんじます。

實「左樣か。それではマア安心だはへ。 直「ハイお茶を。ト差出し、「今にお煎茶を調らへますヨ。ト湯を沸しにかゝれば、 實「ナニ〳〵湯も茶もいらねへ。酒を一ト口呑う。 柳「ヱ、それぢやァ何ぞあつらへて遣りませう。 實「イヤ〳〵それに及ばねへ。今こゝへ來がけに廣小路へ賴んで來たア。人手もねへ所で世話になるのが氣毒だから、萬一留守ならばと思つても見たが、柳吉が病人だからよもや二人ながら宅に居ないこともねへと誂へて來た。トキニノお直や。此方明日上へ登るから、その氣で居ねへヨ。 直「ヱ、なぜでございます。そんなに急にかへ。 實「さればサ上の店に急用が出來て早狀が來たから、直に立から誠に心忙しない。 直「ヲヤ〳〵心細い。どうしたら宜うございませう。ト涙ぐむ。 柳「それはマア餘り急な事で。 實「ナニサまた直に下つて來るから案じないがいゝ。ト懷中より金を五十兩ほど出して、柳吉の前へ渡し、 實「ヱ柳吉。これではマア立派な家業は出來まいが、來年おれが下つて來るまで、何商賣でもして取續いて居るがいゝ。再度來る節には可成に見勢でも出される樣に覺悟をして下るから、其間にも着類位は店へ話して置から、柳吉ではない積りで、お直が手形を持つて、自身に店へ行がいゝ。ト話の中に酒肴も來りて、實右衛門は酒を呑ながら、 實「トキニ柳吉。野暮なことをいふ樣だが、くれ〴〵お直を可愛がつてくだせへヨ。言ずとも知つての通り、當地には親も兄弟もないことなり、又おれ

は兄だといつても大層に年違ひで、娘といつてもまだ年を取つて居さうな、極の妹のこと、末々心細く思ふであらうし、便りといつたら貴様より他には何にもない身の上、必ず見捨てくれてはならないぜ。直「またお下りなさるのは來年かへ。トホロリ涙を落しつゝ言葉なきこそ哀れなり。柳「イエもう段々の御高恩を忘れては罰があたります。例へどんなことがございましても、お直を粗末にはいたしませぬ。實「イヤ左様でもあらうが、おれも少しは聞た事もあり、柳「イエ、何がお耳に入りましても、お直のことは神さまかけて、實「どうぞ不便に思つて下され。イヤお直、其方も和合が過ぎて、こゝろ易だての果は、喧嘩が出來るもの、必ず愛想を盡される様な仕打をしまいぞ。ト暫く異見をしたりける。

第五篇　卷之三

第二十九章

老女辨才天の鐘の音と、調子を合す太神宮の太鼓の打合せ、己の刻を告わたれば、山内門外景色とゝのふ茶屋料理屋、揚枝店のかざり付、中見世出揃つて院内の貸長屋、しん〳〵として留守勝なり。此所に一音院の地内にや、戌亥の隅の一軒家、田圃に近き住居の風情は、深草の地にありたき人の知る體なれば、くはしくいはず。住む其主は二十二三の婀娜なる娘、此土地にて三十になる白齒の島田髷は、少しも珍らしからず。元服すると翌日孫を抱く茶見世の姉上さんもある所なれば、まだ二十三四にては極新造の部なるべし。されども此娘は久しく煩ひて髪も結ず、殊に此節は眼病と見えて、紅の切を手に離さず、座敷の中を探歩行いぢらしさは、一しほ色氣ありて内外の不都合なるは、世話をする男もなきゆゑにやと殊更にしたはしけれ。母親は勝手元を片付けて火鉢の際へ來りて、娘の顔を見ながら、母「ヲヤ今日は少し眼のふちの腫が引た様だヨ。娘「左様かへ道理で今朝は少し痛みが治つた様だは。母「それは嬉しいこつた。今にまた因果地

藏さまの鹽を頂て來るから、眼をよく洗ひなヨ。 娘「アイ。寔に地藏さまはありがたいねへ。左樣いふ中にもわちきにやア、別て御利益がある樣だネ。 母「ナニサそりやア何樣でも一心に成てお願ひ申せば、利てくださるのサ。 娘「ヲヤ左樣だがネ。此間お前にはなした私の夢の樣に見た地獄の事ネ。彼一條は私が三日の間、死んで居る中、實正に地獄へ往て仕まつて、最う此世へは歸られないのを地藏さまが助けて歸してくだすつたのだネ。 母「アヽ左樣サ。それだから御恩を忘れねへ樣に、通して信心をしなせへ。 娘「アイ。それはモウ有がたいと思ひつめて居るけれども、其時あのお閻魔さまの前で、言渡されたのが氣になつてならないが、なぜ蘇生れるほどの運が有ながら、柳さんの女房にはなられないのだらうネ。私きやアあの時にお閻魔さまの側に居た官人さまに、左樣いはうと思つたはネ。正實の女房になられない位ならば、なぜ子まで出來る樣にしてくださいましたと。 母「アハヽヽヽ。左樣いツて見ればよかつた何とおつしやるか。其時言も仕なくつて今になつて其樣なことを言ツたとツても、はじまらねへことだ。 娘「ヲホヽヽ、それだつても、其節はモウ〳〵針の山や血の池だの何だのといふ恐い所を見ながら、森羅天子の前へ連て往れて、そして側に幾人も怖い官人さまが、凶惡顔をして居るものを、どうして思ふことが左樣直さま言れるものかネ。其節朦朧柳さんが見えたけれども、ものが言れなかつた程だも

のヲ。モウ〳〵思ひ出しても恐しくツて、身の毛が立樣だは。ト母子が心正直に、童蒙愚智と思はるれど、女は萬をおそれて粗略に思はぬぞ賴母しき生質といふべきか。女の悟り顏に愼みなきは、發明なりとも賞翫することなかれ。折から此家を尋ねつゝ、やう〳〵門口に立寄る女、年齡二十二三にて、美しき顏は賞るに及ばず、衣裳と髮の結風俗にて、辰巳の唄女と他目に知るゝ其出立。いかなるゆゑか供をも連れず只一人、前後を見まはして、「ハイチツト御免なさいまし。お梅さんのお宅は此方でございますか。」「ハイ此方でございます。誰人でございますかお這入なさいまし。トいふ聲聞いて、障子を明け、「アヽ引。やう〳〵知れた。ハイ母御さん、此程は。トいふ顏を見てお梅の母。 母「ヲヤ〳〵秀八さん。よくマア來ておくんなさつたねへ。お梅や秀八さんがお出だヨ。 うめ「エヽ、秀八さんかへ。何樣してマア來ておくれだか、寔におなつかしかつたねへ。サアお上りな。毎日〳〵お前の噂をしない日はないヨ。 母「サア此方へお出なさいな。どうして此樣に早く出てお出だか。まだ今しがた巳刻をうツたヨ。 秀「ナニネ、最久しい以前から彌三さんと約束して、やう〳〵今日出て來たンだアネ。ヲヤ〳〵梅吉さん。まだ目が惡いのかへ。私きやアもういゝと思つて居たヨ。 うめ「ナニもう段々治りさうだヨ。それぢやア今日は彌三さんと同伴にお出のかへ。 秀「アヽそれたから彌三さんも、こゝへ來てもらふと、尋ねる世話

もなかつたらうけれど、左様するとまた付て來た者の口が喧しいから、私一人で來たは。母「誠にモウ〳〵口でお禮の言盡されることぢやアない。母子が命を繋ぐも、此お梅が蘇生たのも悉皆お前のお影だから、お梅が達者になり次第、何様なことをしても、今度の御恩は報させないければならないヨ。そりやアさうと彌三さんは、何所にお在なさるゝノだエ。秀「ナニあの廣小路の千久專とかいふ家に呑でお在だは。うめ「羨しいねへ。途中は何所迄舟でおいでだ。秀「あの名妻橋の際から上ツてネ。觀音さまの山を遊んで歩行て、それから此所へ來たヨ。ト話の中に梅吉の母は火鉢へ湯を沸し、茶を買に出て行く。うめ「さぞ嬉しかつたらうネ。二個が途中惚氣ながら、秀「ナアニ大違ひだは。此頃ぢやアゝ戀者が出來たものだから、なんだの角だのと道理を付て、足を遠くしていけないヨ。うめ「うそをお言な。お前を他にして、何そんなことが出來るものかネ。また彌三さんも左様いふ浮薄な人ぢやアないヨ。秀「イヽエ〳〵左様でないヨ。しかも歳が十七ばかりで、可愛らしい婀娜な如才ねへ娘だは。それだから彌三さんが血道をあげて居るはナ。うめ「うそばツかり。秀「アレサ實正だヨ。それも知らずにネ。最初お時さんといふ宅へ遊びに行と、其所の宅に其娘があづけてあつてネ。彌三さんは私が其お時さんの所へ出入をするのを知らねへで、私が往て居る所へ、彌三さんが娘に逢に來たはネ。其前にお時さんが、私と彌三さんの

ことを知らないで、娘と彌三さんの噂を私に話て居る所へ、彌三さんが逢に來たンだアネ。それから直に其節思入れ彌三さんをいじめて見たけれども、何をいふにも此方が惚て居るからかなはないヨ。うめ「實に左様だねへ。此方が命も捨る氣になつて、恍惚て居る最中、そんな浮薄をされると、愛想が盡て仕まひさうなものだが、そんな事を聞と猶の事離れるのが否で、不斷より戀しくなつて來て、モウ〳〵氣がもめてならないヨ。其癖腹が立から此方も面當になんぞして、向ふにも氣をもましたらば、悔しのがなほるだらうと思つて見ても、他に實らしい人があつても、チツトもそれには氣が移らねへで、唯彌三さんなら彌三なんばかり戀しい様になるのは、何様いふもんだねへ。腹の立のと、惚れて戀しいのと、心が二ツあるのかへ。秀「實に左様だは。何でも此方が多分惚て恍惚なるのは、昔の世で向を餘り惚させて、氣をもませた報でゞもあるのかと思ふヨ。うめ「さうさねへ。ト目を紅の切で拭ながら、秀八へ先達て見たる地獄の事を、詳しく物語りければ、秀八はつく〳〵と因果の始末を聞て溜息を吐き、實に一度死して蘇生したる梅吉の言葉、元來僞をいはぬ生得を知る故に、少しも疑はず、しばし考へて居たりしが、秀「寔に左様聞て見ると、彌三さんが他に情人をこしらへるも約束ごとかねへ。それぢやアお前も柳さんと緣は切れないが、表向の夫婦にはなられないのだネ。うめ「アヽそれ所ぢやアないヨ。今に上方

から便りがないものヲ。そして今お前に話した地獄のことが、實正ならば、柳さんも一旦何所でか死んだのだらうから、どうなるンだか、私と柳さんの中はわからないはねへ。秀「イ、ヱ、ナニそれ程お前がしつかりと見たことならば、今に柳さんと出合ことがあるに違ひないヨ。それに私きやア先刻から左樣いはうと思つても、話が絶えないから、まだいはなんだが、寔にモウ〳〵不思議なことがあるヨ。うめ「ヲヤ何がへ。秀「エ、何がといつて他の事ではないが、今此所へ來しなに妙なことがあつたヨ。うめ「どんなことがへ。秀「アノネ、私は彌三さんにお前の家を教へてもらつて來たけれども、此所の裏が廣いから、知れなくツて諸方で聞たがネ。此先の井戸のある角の所が、お前の家かと思つて、障子をあけて聞たらばネ。十九ばかりの美麗娘が居て、此方ではございません、私どもは近頃參りましたから、まだお長屋の勝手がわかりません。といふから、跡へ歸つて來ると、雲隱から出て病上りらしい人が、其娘の宅へ這入るのが、先は此方を見ないけれども、私が立止まつて横顔をよく〳〵見たが、何樣見てもお前の柳さんに違ひないと思つたヨ。餘ツぽど其宅へまた往ふと思つて、二足三足跡へかへつたが、よく〳〵考へて見ると、よもや柳さんが上方から歸りも仕なさるまいし、歸つてお出のくらゐならば、お前を尋ねて婦多川へお出でないわけもあるまい。人違ひだと思つたから、それぎりに此所へ來たがネ。目がよくなつたら往て御覽。そりやモウ〳〵柳さんに少しも違はない好男で有たは。うめ「ほんにかへ。早く見たいねへ。そして其娘の亭主かねへ、憎らしい。秀「ヲホ、、、もう嫉妬か。今お前悟つた樣なことをお言ひぢやアないか。うめ「ヲホ、、、それだツても、柳さんによく似た人を亭主にして居る娘があると聞ては羨しくツて、其娘がさぞ嬉しがつて居るだらうと思ふと、何だか憎らしいものヲ。秀「ヲホ、、、お互に恍惚なり切つて居るから困るねへ。ト戀の手取の秀八も、また梅吉も一心に、迷へば只の生娘にも、おとりし如くあどけなき。惚れた同志が情人の噂に前後を忘れつゝ、暫く時をうつしける。

第三十章

再説もお直の兄實右衛門は、柳吉にくはしく後の事まで談合して、上方の店へ登りしかば、柳吉其心ざしを請て有がたく思ひ込み、今は義理にもお直に對して、他心ある風情もなく、元來此地へ下りし節より、梅吉ははや亡人となりたること〻歎き悲しむほどなれば、同じ地内の貸長屋に住とも知らず、知られずしてありける中に、思ひきやお直は柳吉の病氣を苦になして、多田の藥師へ日參をする時しも、梅吉は眼病の平癒を祈らんとて、これも多田の藥師へ日參しけるが、

お直はこれと出會ふこと度々にて、同じ長屋の人ぞともはじめは知らでありけるが、女同志のやさしくも何時か假初に言葉をかけてより、日毎に參詣の途中連れとなり、次第に打解て、互に身の上のことを語り合ひし所、はからずも自然と柳吉のことを兩方より語り合、二人は呆れてしばし思案にくれたりけるとぞ。

○此一條は前の文談より以前にしるし、さて其上にてお直が柳吉へ對して梅吉を蘇生せんなどゝいふ時は、早く看官にわかりやすけれども、既に梅吉が生て居ることは現然たれば、大略推量し給ふならんと、前後につゞりていさゝかお直の言葉に興あらんことをはかる、是は予が筆癖にして珍らしからず。されば柳吉に隱してお直はあらまし梅吉の胸をも聞て、さて其後廿九章にしるしたる柳吉へ對して梅吉のことを戯れの樣に蘇生させんとは言ひしなり。

斯てお直は或日梅吉の方へいたり、母にも知己になりて後、 直「アノウ梅吉さん。一昨日申た通りに違ひありませんか。 うめ「ア、私はまだ眼が平治でないから、母人に密と見て貰ひましたら、柳さんに違ひ有ませんと、今朝言ひますから、お前さんへ對してはお氣毒だけれども、モウ〳〵先刻から氣がもめて〳〵なりませんから、私がお前さんの宅へ參らうと思つて出にかゝつたらば、母人が左樣してはお直さんに濟ないし、また私が斯うして居るのは、秀八さんの彌三さんが世話をしておくれのだから、柳さんに逢ふには、其彌三さんにもはなさないでは濟ないと言てとめるから、やう〳〵堪へて居ましたヨ。 直「さうでございますか、そんならネ。ト何か梅吉に囁けば、嬉しさうに莞爾笑ひ、 うめ「夫ぢやアお前さん。實正に私を邪魔とも、憎いとも思はないでおくれのかへ。 直「ヲヤ〳〵それは私が申口上でございますは。最初にお前のことは知らないけれども、柳さんの爲にお前の樣なお方のあることは知つて居ながら、斯うなつたのだから、私こそお前に邪魔とも憎いとも思はれるンだはネ。夫にさう思はずにおくれの氣ならば、どうぞ私の勝手をいふ樣だが、お前と姉妹になつて、和合したいからサ。どうぞ左樣しておくれなネ。

うめ「寔に有がたう。夫ぢやア今お前のいふ通りにしても能いかねへ。 直「ア、左樣して思入柳さんをいじめてお遣りヨ。かまふことはないから。ト笑ひながら囁きて、お直は先へ歸りゆく。

跡に梅吉は母に頼みて化粧をなし、着物を着かへて、そろ〳〵とさぐり足して、柳吉の住居へこそは至りけるに、はや其時分はお直はまた柳吉の側へより、 直「柳さん今日は最う顔色が常々の樣におなりだねへ。 柳「ア、これぢやアモウ大丈夫だ。 直「それでは梅吉さんにも逢れるねへ。

柳「又其樣な面白くない事をいふヨ。 直「イヽエそれでも私やア梅吉さんの幽靈に逢て、お前を梅さんと私と三人で暮すつもりに約束して置ましたものヲ。 柳「いゝかげんに馬鹿を言ねへナ。

お直
御吉
をいぐ
りきのすけ
おきよ
やどろ
ゆき

モウ〳〵梅吉だらうが、櫻八だらうが用はねへ。直「アレサ其様な情のないことをお言ひでないヨ。私が爰に居ないと、又私を惡くお言だと思ふと、憎らしいヨ。梅吉さんに言告て上げるからいゝ。柳「告口たツてこはいものか。直「其様な强情なことをお言ひなら、梅吉さんを呼んで參るヨ。柳「ア、呼んで來てくんな。しかしお前の足で十萬億土の道は往れめへ。直「往れますのサ。直に呼んで來て、お目にかけるヨ。ト表の方へ立出れば、柳吉は呆れはて、座興も餘り念の入、何故たはひもなき事を、此程よりして幾度か言出すやらんと不思議にて、中敷居の方へ顏を出し、お直が所爲を覗はんと、見やる表の障子を明け、連立て入來る人をよく見れば、紅の緒にて目を押へ、片手はお直に引れつゝ、座敷へ這入るは、たしかに梅吉。柳吉は吃驚して、柳「ヱ、どうして梅吉が此姿は、若や迷ひの一念が。ト脇へ飛退く柳吉の、顏見て笑ふお直の風情、聲を聞くより泣く梅吉、暫く言葉もなかりしが、うめ「柳さん。よく達者で居ておくんなさいましたねへ。直「柳さん何だへ其顏は、寔に膽を潰してサ。ヲホ、、、をかしいねへ。柳「イヤサ、れが膽を潰さねへで何樣するものか。夢でもこんなことがあらうとは思はない。うめ「さうお思ひのは無理ではないけれど、此世を去つた梅吉ならば、最側へもお寄でないのかへ。トいはれても猶柳吉は、悟りかねたる此場の仕義、默然として居たるゆゑ、お直は此程のことを詳しくはなし、梅吉は產後に一旦死たること、また彌三郎の信切、秀八の實情、落もなく物語り、語るも聞くも夢ごゝち、溜息を吐くばかりなりしが、やゝあつて柳吉は、梅吉お直の二女に向ひ、柳「寔に兩方へ面目ない樣なことではあるが、何事も約束ごとゝあきらめて。うめ「ナニそりやアモウ、元はといへば私故に、お店の方も不首尾になつて、上方へ御登の後は、生て再度お目にかゝることはなるまいかと、十ヲが九ツ思ひましたから、其悲しさに煩つて、一旦死んだ私の身のうへ。柳「おゐらも箱根の地藏堂で。ト（これより三日の間夢中になりしことを語り、幻の如きうちにて梅吉を見かけし事を語る）うめ「私も三日の其間、ト（同じ事を見て、既に秀八に話したる由を語る）柳「さうして見れば二人の身は、うめ「緣があつても女房にはなれない私の因果、これからは何樣ぞお直さんと夫婦になつて、末永くと申ても、私がこれからおとなしく、離別て綺麗に脇へ退て居るといふ樣には出來ない心でありますから、何卒此儘緣を切らずに、お直さんと姉妹同前になつて、三人が和合問音信をして暮せは、私は樂しみにして居ますから、直「ヲヤ梅吉さん。それはお前のお言のことだかネ、どうしてマア其樣なことが出來ますものかネ。私こそ半途で柳さんに心易くなつたのだから、お前に堪忍して貰つて、緣を切らずに居さへすればよいはねへ。殊にお前は赤子さんまで出來た中、正實のお内儀さんになるのが當然だはネ。私はお前の側に居て、

お前の産だ赤子さんの守をしながら、柳さんとお前に可愛がつて貰へば、それでモウ本望だと思つて居ますヨ。うめ「イヽヱ、何樣して左樣ではありませんは。マア早く言へばネ、私は柳さんを不首尾た咎のある身のうへ、お前はお兄イさんが、柳さんの身を立樣にしてお上で、始終の所も相應に氣を付てお呉だとのお咄、またかうして私が焦れて居ても、お前が親切にしておくれでなければ今日こんなに柳さんに逢事は出來ませんは。さうして見ると柳さんの爲にも、私の爲にも恩義の深いお前だから、是非正當のお内儀さんになつてお呉でないと、私がどうも濟ないから。

直「イヽヱ、それでは兄さんが些と位の事をしたのを鼻にかけて、私が先へ立樣で、始終柳さんに愛想を盡される基だから、どうぞ則さういはずに、私をば妹だと思つて、始終一同に和合しておくれならば、それで私は十分ございますヨ、ト果しもあらぬ梅吉が、粹な願にお直が猶、中に柳の柳吉が、風次第にはあらねども、靡き易きは男の常、左右を見ても花の顏、增りおとらぬ其中に、久しぶりなる梅吉の、眼の煩ひは一しほの、色香をそへし戀の慾、ならうことなら少しの間、お直がどこぞへはづせばよしと、看官も思ひ給ふならん。それはさて置梅吉は、再度お直に向ひ、うめ「アノネお直さん。同じことを幾程も言樣だがネ。先刻も柳さんにおはなし申た通り、前のよからの約束ごとで、私は赤子さんの出來るほどでも、朝夕柳さんの側に通しては居られない定りごと、お前は後から柳さんにおあひでも、斯してお在のが定まつた夫婦の緣に違ひないと思ひますは。さういふとまたお前の氣で、柳さんと同居にお在のことを嫉妬で言もするかとお思ひだらうが、なか〳〵左樣いふ心ではありませんは。私はもう自分でも助命まいと思ひ極めて、一旦は死んだに違ひない。このしんで往た其先で、モウ〳〵怖い恐しい處へ連て往れて、言聞せられた世の中の定業とやら、それを背くと、夫婦どころか柳さんの顏も見る事が出來なくなるとくれ〴〵も言渡されて、蘇生つたのでございますから、たとへお前が何といつてお呉でも、柳さんの側に居通しては居られないヨ。直「それだツてもアノ能く考へて御覽なねへ。柳さんも種々な苦勞をして、やう〳〵お前に再會て、これから同居にと思つてお在の中を、お前が左樣だと、折角私が手引をした甲斐もないぢやアありませんか。そしてマア柳さんと一緒に活業ないで、此末どう仕樣とお思ひだねへ。うめ「ナニ私だツても柳さんに緣を切られる心は少しもないがネ。此間秀八さんといふ孃が、婦多川から來た節にも、能く相談をして置ましたヨ。他でもないが其秀八さんも、彌三さんと夫婦にはならない緣があるに付て、彌三さんと緣を切らずに、それを樂しみにして置て、昔の歌妓の名高い衆の眞似をする樣だが、何でも私と相志に成て、一生二個の唄女の花を飾り通して、遊ぶといふ心持でありますは。さうすれば柳さんやお前の力にもなられ

るし、證文は卷てもらつても、まだ二三年は年季のある親方へ、慈愛深い恩も返されるゆゑ、三方四方を考へてすることだから、必ずわるく思はずに、私がいふ通りにしておくれな。どうぞ其上のお願ひは、今秀八さんの方で育てゝ貰ふ赤子をば、お前と柳さんの側へ置て、育てゝおくれな。守をば私の母人にさせるから。ト談合の所へ秀八が、此所へ尋ねて障子の外、秀「御免なさいまし。柳さんのお宅は此方でございますか。うめ「ヲヤさういふ聲は秀八さんかへ。秀「梅吉さん。此所にお在か。直「此方へ御はいりなさいまし。柳「ヲヤ〳〵秀八さん。サア〳〵此方へおよりな。ト衆人一度に出迎ひける。

梅吉が蘇生柳吉に再會せし上は、既に滿尾の趣に似たれども、これまでは暫く他方の物語にして、八幡佳年といふ外題に少しくはなれたり。此次六編目に至りては、また婦多川の人情を穿ち、秀八梅吉が婀娜な姿の寛活全盛、唐土名妓傳、傾城奇人傳の風をうつして、古今無双の新趣向あり。續て發行の遲滯なく、よろしく高覽を願ふになん。

地獄の沙汰も金の世に欲を離れし眞實は罪淺草の茅が軒、露をふくみし梅吉が散りて又さくかへり花はこれぞ緣しの戀の隱れ家

鶯の宿とし聞かば竹の戸も音づれてゆく風の梅が香

狂文亭　春江

叙

夫耽二聲色一者。動二心小畫春一樂二邱壑一者。娛二眼拳石觀一。近世不レ論三縉紳與二韋帶一。人好二演史話本一。猶二唐山之人一。好二水滸西廂琵琶剪燈之諸傳奇一。於レ是乎稗官野乘。盛行二于世一。其書精細可レ聽。不二恃郢書燕說一。雖レ然彼善二於此一有レ之。爲永春水八幡鐘者是也。其著作之意。以レ洞二視萬有之人情一爲二之務一。要二之歸趣一。無三事不二勸善懲惡一矣。先レ是開雕。訪二購之一者。日多二一日一。陸續不レ絕。今刻二六編一。其寄暢適悅。最遇二於時情一也。余固無二聲色之耽一。亦無二邱壑之樂一。今得閱レ之。豈啻小畫之春。拳石觀。大則可下以知中我得失所二趣向一之相同上。均二是忠恕之言一耳矣。野語曰觀二水於深川一窺二世波之清濁一。費二金於吉原一。認二人事之險易一。此等之謂與。

戊戌皐月

琴臺老人題

山河の危難かへつてこれ百年の樂み、二世の緣を結ぶのいとぐち、辛らい悲しい峠を越したる箱根の奇遇、身を捨て浮み上りし永代橋の舟の中、正に山水一對の美談といふべし。

狂華亭
爲永春蝶述

第六篇　卷之一

第三十一章

自ら習はで馴れる土地の風俗、好意姿に移りよき唄女の化粧を覺えては、以前の生娘引かへて、心も洒落たお君の風俗、名にしおふたる和哥町の、唄女も恥る素顏の美麗、今湯上りの身粧に、婢女のお富は見惚つゝ、烟草を吸付逆さまに差出し、　とみ「一ぷく召上りませんか。　きみ「アイ。ヲヤお富は何樣したのだへ。烟管を逆さまに出してからに、やけどをするはネ。ヲホ、、、。　とみ「ヲヤ〳〵どういたしませう。御免なさいましヨ。ツイ浮れたのでございます。ヲホ、、、。ト烟草を繼かへて差出す。　きみ「朝ッから何を浮れたのだへ。今言葉をかけて往つた櫻川の由さんにかへ。　とみ「イヽヱ由さんではございません。餘りお前さんの素顏がお美しいから見惚れまして。　きみ「うかれたといふのかへ。其樣に馬鹿にしてお呉でない。なんぼ私が歳がいかないとつて、なぶるもんぢやアないヨ。　とみ「イヽヱ、何樣いたして勿體ない。嬲のなんのと申ことが出來ますものか。實正にマア、其お風呂上りの照々するお顏を、鏡で御覽あそばしまし、お前さ

んのお顔にお前さんも、惚れていらッしやりさうなものでございます。　きみ「ヲヤ〳〵お富としたことが、何程自惚なものでも、自分の顔に看惚る者があるものかねへ。　とみ「ヲホ、、、さうでございますが、この間も此方の旦那さまが、お咄しなさいましたではございませんか、山鳥と申す鳥は其身の羽根の美しいのに看惚て、水へ影を寫して數刻も居るとおつしやいました。きみ「ホ、、、それぢやア私を山鳥と同じことだといふのかへ。山鳥の愚の鏡とは、自分の姿を水鏡にうつして羽根の色に看惚て、目を廻して水へ落て死ぬといふぢやアないかへ。それを譬へて山鳥のおろかの鏡といふといふのだとサ。　とみ「ヲヤ〳〵さうでございますか、私はまた些もそんなことは存じませんから、ツイ高慢らしく不分解たとへを申ましたから御免なさいましヨ。トいひながら、立て火鉢にかけてありし藥鑵の白湯の煮立ゆゑ、蓋をとりのけ、　とみ「ドレお茶を入れて上ませうネ。アノお君さんへ、今日お時さんと何所へかお出なさいますのでございますか。きみ「ア、參る約束だがネ。連の樣子次第で、私は止にするヨ。とみ「ヲヤなぜでござりますへ。きみ「なぜでも彌三さんが、あんまり久しくお出でないから、悔しくつて氣色が惡いものヲ。　とみ「ヲヤマアお前さん。一昨日旦那さんは入らしつたではございませんか。　きみ「アヽそれだから久しいぢやアないか。　とみ「ヲホ、、、。お前さんはマアお慾の深い、一昨日は終日此宅にお出なすつて、和合してモウ私なんぞは、氣の遠くなる樣にお嬉しさうなお顔をして、樂しんでお在ぢやアございませんか。そして私がお障子の外で聞て居つたら、國貞の畫た本の中にも、お前さんの樣な可愛らしい娘はないと、旦那さんがおつしやると、貴孃がすね言葉に、左樣サ秀八さんの樣な婀娜な唄女姿は、國貞の畫にもかゝれますが、私のやうな野暮な者は兎ても畫にかいては貰はれませんとおつしやいました。夫からまたお泣なすつたり、お笑ひなすつたり、私はモウ〳〵〳〵早く旦那がお歸りなさればいゝ、此分ではお君さんのお身の爲にもわるし、私の命が續かないと存じました。ヲホ、、、。　きみ「ヲヤ〳〵マアいつまでも嘘ばツかり、ナニ私が其樣に泣たり、笑つたりするものかネ。そしてモウ一昨日は人の氣に障る樣に愛想盡しばツかり言つてお歸りだから、たしかに秀八さんが何とか言つて、彌三さんをしやくツたのに違ひないと思ふは。　とみ「イヽエ、それはお前さん惡推でございますヨ。此間私がお時さんに聞ましたが、旦那さんの御了管では、是非お前さんを御本宅へ御入なすつて、御本妻の弘めをする積でいらッしやるが、まだ旦那の御親父さんが不承知でお在なさるさうでございます。それだから中々秀八さんを正當のお内儀さんになさる氣では御在なさいませんヨ。何樣してまた何所の男子のお心でも、娼妓と素人ではマアお孃御の方へ團扇をお上げなさいますはネ。　きみ「ヲヤそれはお富の了管違ひだヨ。何樣して〳〵

どんな能女でも、唄女には勝れないは。トいふ折から、小庭の塀の開戸を外より明て這入りながら、藤「イヽヱ、唄女衆より女郎衆より、お君さんの方が、一番能といふ評判でございます。ト言つゝ入來るは彌三郎の友達津藤といふ中位の好男子、後に續いて彌三郎。庭の縁より二人とも上る。きみ「ヲヤ能くいらツしやいましたネ。此方へお出なさいまし。ト急に其邊を片付て亦彌三郎に向ひ、きみ「お前さんマアなぜ昨日はお出なさりませんヱ。寔にお案じ申ました。彌「ナニ案じることがあるものか、此宅へ來るのが活業ぢやアあるまいし。きみ「それでも何様で秀八さん所へお出なさるから、その序にお寄なすつてもよいと存じましてサ。藤「ヲイ〳〵お君さん。お客があるのに、餘り御遠慮なしだネ。きみ「ホヽヽヽヽ、ナニお客でもお前さんだから、能ございますヨ。藤「ナゼ〳〵、私にやア惚氣を請させてもかまはねへと、兼て彌三さんの言付かネ。きみ「ハイ桃江園さんは不斷里吉さんやお歳さんのことで、請させられるから、お前さんがお出の節には、思入れ恍惚て請させると、彌三さんがお言ひでございますは。藤「アハヽヽヽ、些との中不來に居たら、大層に人が悪くなつたノウ。それぢやア彌々彌三さんが戀情こつたらう。きみ「イヽヱ、どうしてお前さんが里吉さんを可愛がる様に、秀八さんばかり可愛がつてお出でいけませんヨ。ヲホヽヽヽ。藤「ナニ此身が里吉に惚れて居るものか。則り家内のお歳の方が可愛はナ。きみ「お前さんは其筈でございます。芝居町とやらは寔に久しく惚れてお在なさるのだから、兩方ともにかはゆくお思ひでございますが、私は秀八さんより後で、彌三さんに逢たのだから叶ひませんヨ。藤「ナンノ〳〵。能事をいふぜ。お前と秀八さんと、ヽヽに、ヽ、になつたではねへか。それから續いて彌三さんが、お前を可愛がつてばかり居ると、此間お時さんに聞たはナ。きみ「お前さんはお時さんを知つてゐらツしやるのかへ。藤「知らなくツてサ。北郭にあの嬢が居た時から、心易いはナ。きみ「ヲヤ〳〵、お前さんもよく諸方へお出なさいますネヱ、性悪に。藤「ナニ性悪なものか。只心易くした女は、何人もあるだらうぢやアねへか。

此時彌三郎は婢女のお富に、酒肴を言付に出して遣り、勝手元にて火を起して居る。これは當時旦那株なれども、其以前年季奉公をして身を立たる人ゆゑ、おのづからまめやかなることと知るべし。

藤「彌三さんお前何をして居るのだ。ト勝手をさし覗く。彌「ヱ、今火をおこして燗をする支度をして居るのだアナ。藤「さうか。家内で其位に働くと餘程賞められるのに、此身アモウ何をすることも出來ねへ。彌「お前は何をしねへでも、鰻の蒲燒と玉子燒と、天壽補元丹と六味地黄丸を精出して居ればいゝのだ。藤「コウ〳〵何で其様に悪くいふのだ、意趣でもあるのか。彌「さ

うちやアねへが、お前をば兎角女が可愛がるから、用心をなさいましといふのヨ。藤「イヤそれは御親切に御念の入たことつてございます。トいふ所へ櫻川由次郎、名見崎榮次二連にて、尤も常住の衣裳にて、由榮「ヘイ御免くださいまし。イヤこれは濱城河岸の旦那、御機嫌。藤「イヤア當時の好男揃ひ、サア〳〵此方へ何様たネ。榮さん此頃は壽樂が嫉妬は止かネ。由「アハ、、、、藤さんがまた皮肉論かネ。ヲヤ家内の旦那は。ト四隅を看まはす。彌「由さん、榮さん。昨日金龍鮮の前で見かけたつけ。榮「ヘイさうでございましたか。昨日は極内で吹矢町を見物に參りました。彌「ハアさうか。ト言ながら座敷へ來り、手拭にて手を拭ながら、彌「アヽ引ヤレ〳〵火ちりんへ炭を入るのに手を眞黑にした。ヲヤお君は何所へ往たのだ。お客を捨て置て、きみ「ハイ唯今。ト部屋の方にて返事をして、やう〳〵に來るは、化粧を仕かけて居たるゆゑ、はやごしらへに、仙女香を付て、衣裳を着かへ、笑顔になりて座に付ながら、由次郎榮次に挨拶をする。此時お富は買物に行き、其品をとゝのへ、仕出し屋と共に來る。折柄隣家の少女の淨るり、

上略へついてくりやるな八幡鐘よかはひお人の目をさます

藤「ついてお呉な八幡鐘を、早くお客を歸したいッ。アハ、、、。

第三十二章

再說お君の宅にては、俄に客の落合て、いとめづらしき座敷の賑ひ、さすがに洒落たる場所がらとて、寄るも騷ぐも面白き、口合滑稽茶番の即席。彼琴通舍が傳を請てか、差合禁句の氣障を交へず、種々の座興に時刻を移し、酒に肴の數そひて、さゞめき笑ふ樂しみの折から、入來る其人はお客のひゐき他にまさる壽樂は緣側より上りて一座へ挨拶をし、座に着けば、彌三郎は盃を壽樂にさして、彌「先刻から待きつて居たぜ。壽「ハイありがたう存じます。直に上らうとする所へ、山王さまのお祭の掛合を持て參つて、それゆゑツィ遲くなりました。藤「何ぞ面白い新趣向が有やすかネ。壽「ヘイ、イヱ毎年〳〵同じ様な註文でございます。由「トキニ壽樂さん。今まで五節句の茶番をお目にかけて居たが、これから九月を勤め樣といふ所だが、早速菊のお節句をお前におゆづり申ませう。何卒一番おもしろくやらかして、私共が出來損なつて、津藤さんにいじめられて居た恥を雪めてお呉なさへ。彌藤「よからう〳〵。サア〳〵新趣向を拜見しやせう。壽「イヤこれは迷惑なことを仰付られるもんだ。兎角に由次郎が、私を憎んで、困らせる樣な事ばかりいたします。藤「ハ、、、、。それもお前が戀の邪魔をしたがるからのことだらう。壽「い

かさまネハ、、、。 榮次「サア〳〵早く菊月の趣向を拜見を願ひます。 壽「エ、忙しない。マア靜かに仕なせへ。ト盃を下に置、暫時考へてゐる。 彌「サァ最う一杯やらかして、早くやんなせへ。 壽「ヘイ〳〵。これはお君さん。はゞかりでございます。ト酌をして貰ひし酒を一息に呑干して、 壽「サア〳〵出來た〳〵。由次郎も榮次もびツくりするナ。 由「イヤハヤ、呆れた大言だ。

榮「前書の様にいけばいゝが。 壽「エヘン〳〵。東西〳〵。サテ九月は菊月ゆゑ、菊をお目にかけます。尤も本朝にて菊をもてあそびまするは、人皇五十代桓武帝の御宇、皇の御製に、 藤「コウ〳〵誰に聞て來たか大變にむづかしく出かけるノ。 由「何でも冠辭で驚かす積りでございませう。 壽「ヲット東西〳〵。ヱヽ引皇の御歌に、己乃巳呂能志具禮乃阿米爾菊酒波奈。ヱヽ引後は何とかでございましたッけ。何でも花を大事に薫を愛して、雨障子を覆ひ、綿を置て露霜をいとひまする。其中にも、黄菊白菊その外の名はなくもがなと、申まする句の通り、菊は此二色に限りまするとと見えます。まづ黄菊をお目にかけませう。則ち黄菊をそが菊と申ますれば、弟草との異名もございます。此曾我菊は花の弟。ト（しやんと極る思入をすれば、早くも其趣を推量して由次郎は側にありし三味線を取りて五郎の相方をひく） 壽「祐經どの〳〵お盃、いたゞきますべい〳〵。ト盃を取て背後へ投げ、 壽「工藤左衛門祐經どのハテ珍らしい對面じやなア。ト席にあり合鯛麵の鉢肴を出す。 藤「イヨ〳〵鯛麵の曾我菊請ました。 壽「エ、引、次は白菊をお目にかけます。サテ此白菊は鎌倉相乘寺の兒でございます。其頃奥州信夫の里の沙門自休と申者、なれ染めまして浮名を立られ、詮方なく白菊は覺悟を極め、江の島へ參る時、渡し守に扇を賴みまして、もし跡より我を尋ねて來る人あらば、その人に渡し吳よと賴みたる扇の歌に、しら菊としのぶの里の人とはゞ思ひ入江の島とこたへよ○うきことを思ひ入江の島かげに捨つる命は浪の下草としるし置て江の島の淵に身を沈め終りければ、彼自休といふ法師も歌一首を殘して共に淵に沈みましたと申ます。其歌に、しら菊の花の情の深き海に共に入江の島ぞ嬉しき。とございますれば、兒と沙門の戀中は則ち是と同じことでございます。トいひながら立つて、櫻川由次郎と榮次を押並べ、鉢肴にありし附合の牛蒡の切小口を見せる。（皆々これを見て） 皆々「ハヽヽヽヽ、アハヽヽヽヽ。 由「いま〳〵しい男だ。茶番にまで意恨をふくんですることもねへ。 藤「アハヽヽヽヽ、〳〵。こりやア大出來だ。しかしこれは此土地限で、いはゞ樂屋落の茶番だぜ。 きみ「なんだか私には些とも分りませんヨ。ヲホヽヽヽヽ。 彌「なるほどこれはお前にはわかるめへ。アハヽヽ、。 きみ「なぜ其様に衆人が可笑ンでございますねエ。 由「左様〳〵。壽樂は茶番が下手だから分りませんねへ。ト笑つて居る。此時津藤は流石の通家なるゆゑ、思ひがけなく彌三郎一人の散

財を氣毒に察しければ、　藤「サアなんと衆人が、彌三さんの所ばかりいそがしい目をさせるでもあるめへ。今ッから何所ぞへ往て遊ぶぢやアねへか。　彌「ナニ私しやア少しも構はないが、家内が狹いからお氣毒だ。　藤「それはいゝが、お君さんやお富どんが迷惑だ。出かけやせう〳〵。お君さんも同伴にお出ナ。　きみ「ハイ有がたうございますが、私は。　藤「イヽヨ此身が連て往ば、お前に引はとらせねへ。そしてモウ此人數ばかりで唄女は呼にも及ばねへから、遠慮することはなしサ。ノウ彌三さん。お君さんを連て行がいゝぢやアねへか。　彌「エ左樣サ。ト少し迷惑なる思入れ。これは彼秀八にお君を運て、落合もすることあらば、大變なりとの心配なるべし。　藤「ナニ〳〵お君さん。構はずお出ナ。差合のない所へ行樣にするから。ト無理に連立、大勢が津藤の進めに喜びて、此所は何里か和哥町に、程遠からぬ假住居を出て、裏より河岸傳ひをしのぶも山の催しか、人待元の座敷なる、その趣は次の卷に詳しくしるせり。

第六篇　卷之二

第三十三章

盛をば餘所に折られて家櫻、憂に早きは落葉なりけりとは、島原の傾城芳野といへる名妓の述懷せし歌なりとかや。彼曲輪の家に咲く櫻は、吉野初瀨の花と替りて遲く開き、早く散る故、それを人間の幸不幸に引あて、非情の草木にさへ得失あればといふ心より、詠みたるものか。また或時に曲輪の花を見て、

こゝにさへさぞな芳野は花ざかり

と吟じけるより、自然他人其名を稱んで芳野とは改名なせしとぞ。此者は風流の旨趣深きのみかは、能傾城の境界を悟り、心は高く身を賤しめ、其人身請せんと言ひし時、石臺の櫻をたとへて教訓をし是をとゞめ、年季中の全盛實に花の盛を失なはず、花麗をつくして島原第一の寛活、その美しき事ならぶ娼妓もなく流行しが、年季明ると剃髮して法名を覺法と改め、桂川の邊に草庵を結びて閑居しけるは、其昔「もえいづるも枯るゝも同じ」と詠し嵯峨の妓王女にも劣らざる

婦人ならずや。猶その芳野の覺悟にも恥ぬ心の唄女の類ひも、時々顯はるゝは、盡せぬ戀の中裏か、邊に近き疊屋横町の西側へ、引移たる婀娜娘は彼柳吉と二世かけて、契りし粹な梅吉が、蘇生たる笑の眉、若がへりとはいはずとも、壯き生得殊更に色香を增せし花の顏、新孃に等しき島田髷、まだ近所へも顏出しせず、落着樂し世帶の道具、母は彼方此方置替ながら、母「ノウお梅。これで此所が片付て能ぢやアないか。 うめ「ア、其方が能ョ。それはさうと、今に秀八さんがお出だらうから、その火鉢の白湯をかけて置てお呉ョ。 母「ナニサ、モウ湯も沸して置くし、些とばかり酒も取つて置たョ。秀八さんばかりではあるまい、彌三郎さんもお出なさるだらう。うめ「イヽヱ、ナアニ今夜は彌三さんはお出ぢやアないョ。 母「左樣か。秀八さんは何ぞ用でもあつて來るとお言ひのか。 うめ「ア、外の用ではないが、わちきの出勤する衣裳の相談に來てお呉のだョ。 母「ヲヤどうしてもそれぢやアまた親方さんの方の勘定を立る樣に勤るのかへ。此間柳さんにめぐり逢つて萬事の相談をした時、さうでなく話が出來たではないかへ。たとへ證文を卷て貰つたといつても、厚く世話になつた事だから、柳さんの方から少しでも秀さんの遣つた金も出し年季の金も三分一は出して、肩身の廣くなる樣にしてお呉の筈ぢやアないかへ。さういふと此方の勝手か知らぬけれど、モウ今更にお前を出勤させて、また苦勞を仕たくない物だノウ。うめ「それは左樣だがネ。此度私が出て勤め樣といふのは、柳さんの爲でもなければ、柳さんが金を出して、私の身を世間廣くしてお呉でないからいふでもなし、早くいへば秀さんと私が內々の相談づくで出勤仕樣といふのだから、お前の心に人を恨んでお呉でないョ。 母「ナニそれはモウお前が承知で、心持に障りもなくすることならば、此母は何でも構はないけれど、愚智をいつて視れば竹さんも（これは柳吉が子供の時の名をいふなり）以前と違つて心面白くない所爲ではあるまいか。何とお前を欺かしたか、くるめたか私にはマア合點がいかないョ。よウく考へて看な、お前は命を亡すほど戀焦れて、一旦死きつて仕まふ大病の苦勞は、誰人がさせたのだへ。別れた後に文一本よこしてくれることもならない樣な付登せの不自由ならば、さぞ此方の事をも苦勞にして居なさるだらうと、言暮したとは大違ひで、上方へ登るより早く可愛らしい、、、、、して、其娘を連れて下つて、三日でも和合活業て居ながら、お前のことを尋ねても呉れないといふは、マア不實な樣に思はれるが、お前はそれを腹も立ず、何樣か此度の出勤も、柳さんへ達引にする相談らしいから、詳しく聞ても居なんだが、秀八さんなんぞもそれがいゝとお言ひのかへ。壯い勇肌な了管で後悔をしなさんなョ。トさばけた母も子を思ふ心は、さすが結ぼれし緣も恨みとなる鐘は、はや戌刻をぞ告渡る。折から外面に夜商人、 なめし「お豆腐でござい引。奈良茶よろし

う〳〵。母「ヲヤ〳〵久し振であの聲を聞くノウ。中島町に居た時分に、毎度亥刻ごろに來イ〳〵したつけ。うめ「母御お前好きだから、あんかけのお豆腐を買てお上りな。母「ナニマア今夜は止さうヨ。此土地に住居ば毎晩來るから何時でも自由だ。それにモウあの御膳を買つて、お前に給させ樣とした節、急に病體が惡くなつて目を引付られたことを思ひ出したら身中が戰慄とする樣だ。トいふ顏ながめて梅吉が、涙を浮めうるみ聲、うめ「ホンニ私が惡いから、其樣なことまでも思ひ出すほど苦勞をせさたのだねへ。モウ〳〵是から思入れ骨を折つて、お前を樂に活業させるから堪忍しておくれ、さういふと自惚らしいけれど、秀八さんと私が腹を合せてお座敷を勤めた日には、また一度は花々しく見板でも賞られる樣にして見せ樣と思ひますは。母「アレサ病身な癖にその意地張と、他人にまけまいといふ我勝の氣性が、則り體にさはるから苦勞だヨ。そしてマア第一柳さんは旅中から連て來た娘を女房にするのかへ。ト不足をいふ母の慈悲、欲心ゆゑにいふにはあらねど、末を案じの繰言なるべし。梅吉とても悟りを開き、迷ひをとらぬ聖僧の身分に等しきことならず、少しは嫉妬の心もあれど、また倩々と思ひ出せば、夢幻の地獄城、因果の道理を吳々も言聞られし定りごと、緣は切れねど同居する本妻とてはなられぬと、兼々示しを承たれば、やう〳〵に胸を晴し、うめ「ヲヤ〳〵母人さん。お前また其樣なことをいつて私に

まで氣色を惡くさせるのかへ。其娘のお直さんが、段々の義理を盡して、私と柳さんと正實の夫婦に仕なければならないといふのを、私の方から無理に斷はつて、赤子をも育て貰はふといふ約束をしたのだはネ。そしてまだ馴染はないけれど寔に信切な心のお直さんだから、始終お前の爲にも私の身にとつても、惡い樣には仕まひから、左樣おもつてお出ナ。それに此間もお前に話した森羅殿のお敎へなさつたことをお忘れか。母「ほんに左樣だつけノ。夫ならマアお前の了管の通り秀八さんとよウく相談して、何卒此母の苦勞でない樣にして吳なヨ。ト娘一人を便りとする母ゆゑ、諸事子任せにするは此邊の常ならんか。折しも表の戸を音信て、秀「お梅さん、母御さん。モウお寢か。うめ「イ、エ、秀八さんかへ。今明るヨ。トいひながら、明れば這入る秀八が、秀「マア遲いから今夜アモウ來まいかと思つたは。ぢれッたくて〳〵、悔しくなつて來たンだアネ。うめ「ヲヤお座敷が長くつてかへ。秀「ナニそれならば限があるから能いがネ。今日は出番の衆で晩方にはモウ歸つたから、亥刻まで思入此所で遊ぼうと思つたのに、否アなお座敷を賴れて今まで苦しんで居たは。ヲヤ母御さんは。うめ「裏口へ今出ました。是は確に秀八の來りしを聞付て、直に料理屋へ肴を誂へに至りしと思はる。秀「アノウ梅吉さん。此間私が案じた衣裳のつもりにお仕か。うめ「アヽあの方が能らうネヱ。それは左樣と、寄場の方へ少しは話してお吳

か。 秀「イヽエ、まだ誰人にも左様言はないヨ。そしてネ、親方さんの方へはネ、かう仕様と思ふは。マアネ内室さんに内所で話して、それから見板へ板をかけて置て貰つて、大一座のお客か、お客は少なくつても太夫衆や私達の方が四組と五組揃つて出ることの有時、新嬢の弘めをするのが遅日て、初の座敷と一度になつたといふ様にして、少し今までの形にないことだが、出拔にお前をつれて出てネ、世間中死んだと思つて居る所へ、久しぶりで其美しい愛敬を看せて、ワツと言せたいからサ。 うめ「ヲホヽヽヽ、また幽靈が出たと言ひは爲まいかネ。 秀「ワツと言て吃驚すると言たからかへ。ホヽヽそれだがネ、何様で私がお前の幽靈に逢つたことを知らないものもないから、急度何とか名を付られるヨ。 うめ「アヽねへ、幽靈お梅とでも言はれるだらうヨ。ヲホヽヽヽ。

第三十四章

口舌しらけて何となく、言葉も途切無言にて、暫く二人が背中背、兼々お梅の話にて、定まる縁と知りながらも、愚痴をいふのは戀の欲。 秀「モシ彌三さん、今の様なことをいツたツても、夫ほど腹をお立ちでなくつても能ぢやアないか。何でも此頃はお前の心が變つてお在だから、私のいふことは氣にばかり障るンだネエ。何様しても夫婦になられる身の上でないから、あきらめて居るけれども、餘り片落におしだから、愚痴も言たのだから堪忍おしな。 彌「何にも片落には仕ないが、左様するだらうといふ惡推で、愚痴をいふのだア。他人にも彼是賞られて居る身分で似合はないぢやアあるめへか。そして梅吉の一件で、此身も中裏中の唄女妓どもに名を知られてから、お前の亭主と極つた様に思はれるか、笑はれるかして居ながら、不實もできず、又不實をされちやア猶男がたゝねへと覺悟の身を、其様に輕々しく嫉妬をすることもあるめへ。半日か一日來ねへと、直にをかしく思ふが、決して了管違へして氣をもまねへがいゝ。他人に聞れても恥かしいぢやアねへか。 秀「ヲヤひどくたしなませてお前はんの勝手なことを仕様とお思ひだらうが、左様は出來ませんは。何も私が獨り可愛がられて、お君さんを止てお呉なさいましといふのぢやアなし、何卒傍輩に笑はれたくないから、昨日の様に華々しく君女を連て、表を騷いで通つたり、山で他人の評判になる様にしてお呉でないと言たンでありますはナ。 彌「コウ〳〵それが大層に心得違だ。昨日太夫を連て松本へ往たのは、お前も知己津藤さんが思ひついた催しで、實はお君をお前に引合して、たとへ兩方に否應があらうとも、大勢が立合て無理にお君をお前の妹分に、 秀「ヲヤ何様して其様な不躾なことが出來ますものか。私は賤しい唄女の身、お君さんは

秀八
彌三郎ハ
お君の
文を

お前はんの御本妻さまでございますものヲ、それは兎ても及びないこツて其樣な願ひは仕ません
は。 彌「ヲヤをかしく身分の競を言出したのだネ。身の上の甲乙を言つて視れば、お前は今こそ
唄女でも、元をいへばお孃さま、私の爲には御主人のこと、お君は貧乏人の娘で、宿なし同前の
身だから、妹分にするのも外聞がわりいと思ふはずサ。お君はさし置て此身も粗略な言葉なんぞ
をお前に言てはすまないわけサ。以後隨分氣を付て言葉も遣ひませう。 秀「イヽヱ、今更そんな
逃口上をお言ひだからといつて、それにこぢつけられは仕ませんは。女房にこそなられずとも、
來世にまで極つてあるお前はんと私の情合だから、モウ〳〵主從の緣は上下になつて居ますヨ。
それだから私はどうしてもお前さんのお召仕サ。其奉公までもさせない、遣はないとお言なら、
死んで仕舞ますヨ。 彌「梅吉さんの樣に直に蘇生といゝが、歸つて來ねへ日にやア、追付て死ん
で行のが大變だから、彌々死ぬなら同時にするから知らせてお呉なせへ。 秀「イヽヱお前さんは
お君さんといふ大事の御内室さんがお在なさるから、私なんぞとお死になさつては濟ません。第
一ママ地獄で不承知でございますヨ。おどけな挨拶を仕ながらも、悟り兼たる女の情、これほど
までに苦勞して、男も實意の生得、かの梅吉のことまでも、賴めば引ぬ氣性といひ、萬事やさし
き彌三郎、此身も元來惚拔て生死を誓つた中なるのに、なぜ夫婦にはなられぬと、神々さまが定
めたことぞ。互に浮氣な心でなく、辛苦も厭はぬ覺悟でも、添遂げられぬといふ緣ならば、最初
から情人にも知己にもならぬ樣には出來ぬのか。惚られもせず惚もせずば、戀路の苦勞や間違で
情死なんぞはあるまいのに、月下氷人の所爲とやらいふのは、嘘か欺しか悔しいことと、前後を
考へ出して眼に泪、思はず其所に泣伏せば、彌三郎も推量して、 彌「コウ泣ずともいゝぢやアな
いか。何もかも能合點が出來る癖に、折節そんなことを言出して、泣たり腹を立たりするがノ、
ママア今言事を能く聞解なヨ。成程お前と深く言合した中で、他にお君の樣なものが出來たのは、
面白くないとも思ふだらうが、あれも寔に餘義ない緣があつて、昔から知つた中、殊に一旦死ん
だのを助けた後が片付もなし、あれも段々賴むから詮方なしに、 秀「ヲヤ否な詮方なしだねへ。
あれ程美しい娘に、ゝになるのが詮方なしかへ。私が男ならば命を捨ても、ゝになりますは。お
前さんの氣が實にお君さんの樣なのでも詮方なしでお在のならば、兎てもわちき位の女が何樣氣
を揉んだといつたツて、叶はないこつたから、實正にあきらめて死でも仕た方が、氣がもめない
でいゝかと思ひますヨ。 彌「イヤハヤ呆れたものだ。さう言葉の前後まで咎められちやア、滅多
に話もならねへことだ。能考へてみなせへ、お君とお前と同樣に思ふ男があるものか。たとへい
はゞ乳呑子を相手にして、咄しをする樣に聞分けも面白味もねへお君と、苦勞人の中で別て心配

の行屆いた秀八といふ唄女と何方が取ものだらう。他人の目で視ても、聞ても知れたことだ。誰がお前を袖にして、兒女に心が移るものか。唯此方の了管で、親兄弟もねへ兒だから、不便だといふ所で世話もして置様なものゝ、彌々お前が氣障りに思ふならば、此後お君を捨て仕まはうよ、何所へでも遣つて仕まうのス。 秀「イヽヱさうして私の知らない所へ置て、お前はんが十分に慈愛がらうとお思ひだらうが、それぢやア餘り私が可哀さうぢやアありませんか。それよりは兎てもお前はんの生得で、一旦可愛がつた者を捨ることの出來ない氣性でお在だから、お君さんを止るの捨るのといふ心にないことを、私にお言でなくつても宜いから、斯してお呉なさいましな。

彌「どうせうといふのだ。 秀「ナニネ他の願ひぢやアないが、お君さんを私の母御の娘にして、少しの間母子の様に緣を深く結ぶ様に同居にして置て、それから後に何卒お君さんを本宅の御内室さんに入て、世間へも廣く私の母人さんを嫁の母だからと披露して、お前さんの側へ置て世話をして貰つてお呉なはいナ。 彌「それは津藤さんが考へて呉た通りの註文で、お君をお前の妹にして貰へば、お前の母御さんはお君の母も同前だから、本宅へ入様と世話を仕様と、隱居所をこしらへ様と當りまへだが、お前はそして何様せうといふ氣だ。 秀「私かへ。私はマア思入座敷を精出してネ。裏町か稲荷横町へ家をこしらへて、お前はんに朝夕來て貰ひますは。 彌「、、、、にばかりか、、、、、いのだノ。そして何様か仕様と思つて蟲のいゝ。 秀「ホ、、、、つまらないことをお言な。朝夕といへば夜晝來て居てもらひたいといふこツてありますはネ。其代りに他人にも賞られるほど精を出して、梅吉さんと二個で十分金をまふけて、母人さんの小遣も私の身の入様も、お前はんの世話にならない様に仕ますヨ。 彌「ナアニ其様事を言つたつて左様して濟むものか。それぢやア元主人にした母人さんへ對しても義理が立ないはナ。 秀「ヲヤなぜへ。私が望んでするこつたから、左様してお呉でも能ぢやアありませんか。 彌「それはお前が此身の心も知らずに居るから、左様いふのだ。マアよく考へて見なせへ。今にもお前の身を引かせる様に算段が出來さへすれば、家内の方も手都合を能して置て、直に女房弘めをしてお前を入様と思ふから、お君を別に家をこしらへて遣つたのだアナ。左もなければ義理の深いお前のことを後にして、ナニお君の家を先へこしらへて遣るものか。それに付ても此間中梅吉さんの一件だの。お時さんの溫泉だの、何の角のと大變に物入が續いたから、少し都合が悪くなつて、十日や二十日にお前を引込せる様には出來ねへが、是非此年の内に年季を拔て、母御さんにも安堵させて上なければならねへ。それも武家へ出して置た金が返濟さへすれば、骨も何も折れるこつちやアなし、當のないことで日を延すのでないから、必ず恨みがましく思はねへ様に仕なせへ。了管違をして

彼是愚痴をいはれると、此身の胸をいたくして、前後の事を都合して居る甲斐がないといふものだ。トいはれて視れは秀八が、恪氣も今は恥かしく、惚れた男の心根が斯まで定まりあるならば、表向にて本妻といはれずとても、樂しみは互に深き妾宅の遠慮のいらぬが遙にまし、世間の交情に堅い言葉の義理順宜をいふて、氣兼を仕様より彼梅吉と言合せし女の意地と、名を知れた規模をたて、今一盛を咲せんと、彌々心を定めける。

第六篇　卷之三

第三十五章

春雨の晴れて閑和な午の刻、まだ朝飯の膳椀が、勝手に洗ひかけてあり。表の方の格子から、外面を眺めて退屈の欠をしながら隣家の家の幼兒を呼かけ、梅「ヲヤ〳〵瀧兒さん。モウ何をかおねだりだネへ。アイ私にも些とお呉ナ。ヲホ、、、實正にお呉かへ嬉しいネへ。ト手を格子の間から出して、幼兒の持つて居る菓子を請取にかゝれば、幼兒は又手に持し菓子を引込しにかゝる。梅「ヲホ、、、否々かへ、私をお欺かしだネ。母御さんのお背中をお菓子の粉だらけにおしだヨ。姉上さん些とお這入なさいナ。

作者曰。凡唄女衆又は茶店娘、三味線の師匠達などの類の婦人、其身より年上の女を尊めて呼には、大略名をいはずして血緣ならざるをも姉さんと呼ぶ。これ則姉上さまと尊みいふ心なり。などゝいはずとも看官は先刻御承知ならんか。勇壯の女を姉御といふも、賤しき中の尊稱なり。

女「ハイ有がたう。トいひながら、格子の際へ近付窓を覗ながら、女「ヲヤ〳〵お前さんお一人かへ。梅「イヽヱ、母人も居ますヨ。サア瀧さん私にチツト抱おし、能味を上るから、女「ナニモウ下へおろすと荒業をしていけませんヨ。梅「イヽヱナアニ、昨日も久しく私の宅にお在だけれども、溫順してお在でありましたは。誠に可愛顏をおしだネへ。サア〳〵お這入り。と三尺の口の戸を明る。女「イヽヱ、折角綺麗に片付て在のに、お疊でも穢すと惡うございます。梅「ナアニ穢ても能うございますヨ。そしてまだ漸々落雁を上りはじめで、お乳ばかりだから、小便でもなんでも穢なくはありませんヨ。まだお乳臭い匂ひが仕ますヨ。私きやアお乳の匂ひのする赤兒が好でございますは。女「ヲホ、、、それぢやア早く赤子さんをおこしらへなさいナ。トいはれて心に恥かしく、萬一過にしことなどを聞傳へてはゐぬのかと、暫時言葉もさしつかへ、顏を赤らめ居たりしが、彼女房は近頃隣家へ引越て來りしゆゑ、お梅の事を少しも知らねば、氣も付ず、女「イヱ實はネ。お前さんなんぞのやうに柔弱でお在なさつちやア、赤子さんなんぞが出來てはいけませんヨ。兒凡惱なものは兒が出來ないと言ますから、お前さんの樣に幼兒を可愛がるものは、赤兒は滅多に出來ますまいヨ。そしてネ、あんまり兒を可愛がると、兒育がないと言ひますヨ。梅「ヲヤ夫じやア赤兒をば、なるたけ憎がるのが能のでありますかねへ。女「ヲホ、、、ナニサ憎がるも惡いけれども、能加減にして置が宜ございますはネ。併し萬一お前さんなんぞが、赤子さんがお出來ならば、どんなにかお可愛がりだらうねへ。ト言ふ中に、小兒はお梅の膝に這上りて機嫌よく遊び、懷中を目がけ、結城紬の媚茶の辨慶縞へ、黑繻子の半襟の掛りし胸の所を明にかゝる。梅「ヲヤ〳〵お乳を呑でお呉のかへ。ト言ながら、雪より白き胸の所を、衣紋を左右へ開き、梅「ヲホ、、、、可愛ねへ。ト抱寄せる。小兒の母は氣の毒さうに、母「アレサ瀧坊や、何樣して姉上さんのお乳が出るものかネ。ホ、、、まだどうも落雁なんぞよりは、お乳の方が能さうで、兎角にお乳ばかり給べたがりますヨ。他女さまのでもなんでも、お乳へ取付てなりませんから、うるさくツてお氣毒でなりません。此間も名見崎の榮さんが、私宅へ遊びにお出の時も則抱つてからに榮さんの懷へ手を入れて、乳を探しますからネ。大笑ひを致しましたヨヲホ、、、。梅「ヲホ、、、左樣でございますか。可愛瀧さんだねへ。ト小兒の顏を見て笑ひながら、梅「しかし女榮さんといはれる程のやさしい榮次さんだから、お乳が出るかも知れないネへ。ト小兒を抱あげて其身の横顏へ、小兒の顏を押付させて頰を摺るやうにしながら、遊び居る折から隣家にて、此小兒の爺親の聲と推量て、▲「おしまや〳〵、鳥渡來て呉な。島「アイ〳〵、サア瀧坊やお出、爺が用があるさうだから、ト手を出して抱にかゝる。梅「ナニサ置ておいでな

さいましナ。私が氣を付て上ますヨ。 島「ハイ有がたうございます。それでもお前さんの膝へ小便でもしかけると悪うございますヨ。 梅「イ、ヱ宜ございますから、マア少しのうち置て、私に貸してお呉なさいな。ネヘ瀧さん二子で遊びませうネヘ。ト立あがり、窓より外面の方を覗かせ、又は奥の方へ連行などして、さも可愛がる様に取扱ひ居るゆゑ、母親は嬉しき風情にて、 島「ヲホ、、、、それぢやア能幸ひにお願ひ申て歸りますヨ。ト小兒を置て駈出しゆく。お梅は跡に彼小兒を遊ばしながら涙ぐむ、心の中をおしはかれば、實にも哀れな世の中の祥不祥、是ぞと思ひ定むる時は、後々までも考へ極めて不爲事はあらねども、彼に付けこれにつけ、後悔するは凡夫の常、そも〳〵お梅は大病にて、既に冥土へ赴きて、過去前生の因縁をも、得度なしたるのみならず、最期の時にも一念を定めて、現在秀八に我兒を賴み、生死の海を越えて此世を去し身も、蘇生ては又更に、女子の愚痴のくよ〳〵と思ひ亂るゞ恩愛は、隔てゝいとゞ增鏡、疊り勝なる朝夕に、乳養の我兒を苦にしたる折も隣家の幼兒を抱に付ても奈何にせしと、胸にこたへて目にうかめし涙は、母の情なるべし。 梅「ヲヤ〳〵小便をおしだネ。アレまだ出るのかヘ。トいくぢもなく膝を放して抱ながら、 梅「母人さん、其處の雜巾をかしておくれナ。ヲヤ〳〵今まで水走元に居たツけがノウ。買物にお出ならば賴むものがあると言て置くのに、後生樂だヨ。じれッたい。

トいふ折から、母は裏口より這入、 母「何が後生樂でじれつてへのだヱ。 梅「ヲヤお前は其處にお出が吃驚したヨ。トいへは、母親は笑ひながら、 母「此身が居ないと思つて大層に叱言をいふノウ。 梅「ヲヤ嘘ばつかり。 母「ナニ僞を言ふものかナ。老年ても未だ耳は大丈夫だ。 梅「今まで何處にお出だか出しぬきに來てからに、そして、 母「アハ、、、出拔もをかしいノウ。此身は日和になつたから、急に勝手元を仕舞かけて、粘付物をして裏口に居たンだから、何も出拔なこともないはな。其身が叱言をいつたのを聞れた悔しさに、出拔に家内へ這入たといふのは、お前が無理だヨ。トいひながら乾たる雜巾を持來り、疊を拭ひ小兒を抱取り、 母「マアお前はその衣服を脱で中形のと着替て干なゝ。 梅「ア、ナニ些とばかりしか濡れやしないヨ。ヲホ、、、、他人に小便をしかけて平氣で居るヨ。誠に溫順だねヘ。アノ私の赤兒もモウ今に此位になるかねヘ。 母「ナニまだこの子位の大きさになるのは、餘程間があるヨ。それはいゝが此兒の衣服は濡れやアしないかノ。 梅「イ、ヱ今見たけども些ともしかけてはないヨ。 母「ハ、、、上手に小便をして可笑のかヘ。ト母子二人が氣性よく、他の兒にまでやはらかに當りの人の氣請もよく、まだ居馴染ねど衆人の心易くぞ入つどふ。向側なる娘お樂、 ▲「ヲヤお梅さん。何時にか兒持にお成だネ。とんだ能お似合だは。 梅「ア、私が今產だのだヨ。可愛らしい兒だらうネ。ト抱て居た子を差出

せば、表に居るゆゑ小兒の癖、直に手を出してお藥に抱る。 らく「ヲヤ〳〵外面が見たくなつたのかへ。氣の多いネへ、ホ、、、。 梅「それぢやアお前に貸てあげるから、直に隣家へお歸し申ておくれナ。又貸だから惡いけれども、ヲホ、、、。 らく「ハイ〳〵確にお屆申ます。ト笑ひながら抱きつゝ笛吹ならす飴賣の居たりし方へ歩行ゆく。お梅は火鉢の際に座りて、 梅「母人さん、お前先刻さうお言ひの買物にお出か。 母「ナニサまだ後に行のだヨ。日の當る中に糊付物をして仕舞て、遲くなれば今日買に不行とも能はな。そして今日は竹さんが來なさる約束じやアないか。 梅「イ、ヱ、ナニ左樣じやアないヨ。ト噂の所へ、柳吉はお直に小兒を抱かせて入來る。 母「ソレ見な、此身の覺えの通りだらう。 梅「ヲヤ母人さんが今噂をして居た所でございますは。サアお直さん此方へお出なさいな。 直「ハイ姉さん今日は。ト言ながら、お梅の產し小兒を抱直して、お梅の方へ顏を差出し、直「ハイ母人さんぢやアない、ヲホ、、、姉さんと言せるのかへ。 柳「アハ、、、、今の中は啞も同前だから、何とも言得るこつちやアねへ。 直「アレサ可愛さうに啞だなんぞとお言でからに、何又赤子さんの中に口をきくものかネ。サア姉さん、些とお抱なさいヨ。誠にモウ溫順くツて少しも泣ないから、能ございますは。今も此子を連れに寄た時に、アノウ今一人の母人さんが丁度來て、抱てお出でございましたは。ヲホ、、、。

作者曰。今一人の母御さんとは、秀八の事をいふ言葉にして、お直は梅吉の所へ來る途中、乳養女の宅へ立寄り、此小兒を抱來りて梅吉に見する事にはありける。又梅吉は程近き所に住居ども其日數も僅にして、諸方へ遠慮といひ、未だ障ることありて再勤もせざるゆゑ、半分は隱れて他人に不逢、殊に彼是と義理深き事なれば、自由に我子にも逢がたく過せしなり。すべて此一段は常にある所の人情に、親子恩愛の意味なればよく〳〵其心を察したまへ。

第三十六章

對客席にあらで友達同志、皆其職に應じたる遊戯をなすといふにもあらず。我儘に幇間唱女が寄集り、何やら老實な相談の、用事は三分遊びが七分、自らなるをかしみと、童戯た所爲が此連中の氣質にして面白し。

そも〳〵唄女幇間はお客に出勤ても浮やかに、さも面白く、他見には羨しき樣に見ゆれども、勤となれば中々に苦勞と悔しき心の底、言にいはれぬ活業とは兼て知れたる事ながら、其氣晴しにあらずして、御祭禮場所から賴まれし事に付たる寄合の、席は隔ぬ和合の友達、氣兼遠慮の用心なければ、此席上には素人もかはらぬ風情と察して讀むべし。例の中形本にてお

馴染の太夫唄女七八人、待元の一間にて、

櫻川由「向ふのをばさん鳥渡お出。 唄女春吉「鬼か怖くて往れません。ト（いへば、脇より新孝は進み出で） 新「そんなら私が參りませう。ト（いひつゝ櫻川由次郎の差出せし猪口を執つて、他の唄女の前へ取次で酒を呑せる。）由「ヲヤ〳〵此男ア無法な人ぢやアないか。折角おれが、、の處へさした猪口を横合から引奪とはどうしたもんだ。 春「ヲヤ〳〵由さん、私きやアお前の情女じやアないヨ。否氣ネへ。 由「何故だ〳〵。夫ぢやアあれ程極めた事を變替か。 春「ア、約束もしないがネ否だヨ。 由「約束を忘れたのも詮方もないが、情女になるのは否だとは愛想盡しだッ。 春「夫ならなぜ年の老ないものを捕へて、姑さんだなんぞとお言だ。 新「アハ、、、。これは成程御尤千萬の事た。 壽樂「ム、お春女のが理屈に違ひない、ハ、、、。 由「ナン面白くもねへ。他の落度といふと、心底から嬉しがつて、各々に笑つてくれることもないはナ。 榮「ハイ春吉さん、あげます。此猪口を一ツ上つて和合にお前から由さんに遣ておくんなせへ。 新「アハ、、榮次さんが贔負に出るからをかしい。 春「ヲホ、、、、ホンニ左様だツけネ。榮さんの仲人じやア猶の事、由さんと和合をするのは否だヨ。 由「ナル、つまらねへことを氣にかけるぜ。世間には伯母さんと言れる人が、十六七歳で、言人が二十四五の男で、いはれる方の伯母さんが、美しい娘で居るのが幾人も在はナ。 春「壽樂さん。あれは何といふ事たか私にやアわからないヨ。壽「アハ、、、〳〵。成程わからない言解だから得心ないはずサ。親類が多いと、伯母さんが二十位、甥が四十位のも尋ね探せばあるだらうから、姑さんといつても、壯い娘だと思へといふのだらう。 春「ヲホ、、、、左様かへ。それでは私が十六七で、由さんが四十だネ。 由「コウ〳〵何で其様に此身をいじめるのだ。情人を變替するのみならず、まだ青二才といはれる此好男を四十だなんぞと馬鹿にする事もねへはナ。 春「ソレ御覽、お前が壯年のに四十になると言れゝば、腹をお立ぢやアないか。夫だから私のことを姑さんとお言のを、私が腹を立たのは無理ぢやアあるまいネ。 由「エ、左様言れると、些と困るノウ。 秀八「由さん閉口でお仕舞か。不便さうだねへ。 榮「どうも好男はそねまれるテ。 秀「ホ、、、、女にも言込られるのが、好男かへ。チツト強くして上たいもんだ。モシ由さん便りがすけないとお思ひならば、私が情合になつて上やうぢやアないか。 由「ヘイ、思召は有がたうございますが、私には。 壽「お熊といふ美女のが女房になつて居ますから、と言のか。 由「エ、ナニさういふ譯では。 榮「コレサ〳〵由さん。何だか今日はお前の言葉が出來損い計りになつて往ないぜ。 新「秀八さんが情合になつてやらうなんぞといふのを、澤山さうに斷りにかゝつたり、力身を言たりするから惡いのだ。 由「ナニさういふが

太夫
娘
祭礼乃
寄合

ノ。壽「コレサ〳〵、今夜ア何をすると言て此所へ寄集まつたのだと思ふか。そんな事ばかり日中から言て居て、大事の祭の趣向はどうするのだ。三ケ所だから各々に籤取にでもして出る場所を極るが能ぢやアないか。新孝「ホンニ左樣だツけノウ。サア衆人が眞面目になつて、御祭禮の相談にかゝらうぜ。どうも先刻ツから遊戯でばかり居るもんだから、咄しが出來ない。全體こんな相談に美麗女性を交ぜるのが悪い。以來は春吉さんだの、秀吉さんだのは呼ずに、後日ではなせば濟はな。鶴次「駒吉さんと私は美しくないかへ。駒「なぜ秀八さんと春吉さんばかり美しいとお言だ。ヱ、新孝さん。三孝「サア〳〵又新孝さんの叱られる役になつた。何でも是は、壽「ヲツト〳〵三孝さん。又口を出して雜交かへすのか。サア〳〵籤が出來たから、御信心の上でお拔なせへ。三ケ所ながら勝劣はないが、てん〴〵その好む町内が有だらうから、其町内へ出る樣に仕なせへ。▲「ナニ〳〵何所でも構はない。辨當の美味給金の澤山ありさうな町内が能ノウ。由「また〳〵其樣な慾の深い事を言のは誰だ、人品のわりい。壽「アハヽヽヽ。誰だか名前が書てなく、「の角に▲がついてあるから、不分明のサ。なる程作者といふものは、氣を用ひ樣が違ふものだ。春「ヲヤ作者も氣の付ないのが多いヨ。人情本ばかり著述ないで、些と怖い化物咄しでも出拔能ネへ。三孝「イヤ怪談は古風で行ないネ。併し此間池の端の狂訓亭へ用があつて、行た時に門人が寄合て種々の奇談をはなして居るのを聞たが、其中で春友といふ作者の咄したのと、伊豫の國の字和島のお人で、爲永春英といふのが咄した怪談が、一番怖かつた。春「ヲヤ〳〵三孝さんお前其時狂訓亭の宅でお聞のかへ。さぞ面白かつたらうネへ。三孝「ナニ〳〵作者も思ひの外野暮でつまらないものサ。左樣言ふ中にも人情本の元祖と書て出す狂訓亭といふ作者は、誠に否な老父でモウ年齡一百二十歳ばかりだ。それだから流行におくれて、をもしろくない人だはネ。新「それは能が、何だか夜が更けたやうに世間が淋しくなつて、少し怪談といふ心持で、氣味が悪くなつて來たじやアないか。由「ホンニ左樣いはれて氣が付と、何だか物凄くなつた樣だノ。春「ヱ、何ぞ化て出るのかへ。壽「アハヽヽヽ、臆病なことをいふぜ。ナニ何が化て來るものか。トいふを聞居る一個の唄女、かねて評判の臆病もの、弱吉といふが立あがり、よわ「ドレ私やア小便に往て來樣や。誰人ぞ一所にお出でないか。春「私やア否だは。よわ「秀八さんお出な。秀「ヲヤ私やア今往て來たヨ。よわ「左樣かへ。それぢやア一個で往て來樣。ト此座敷より二間ほど隔てし奥の間を通り、それより厠へ往きたりしが、奈何にせしやら物音して、よわ「アレエ引。ト一聲叫びつゝ其儘どうと倒れし樣子、誰人なるか女の聲にて、倒れたる弱吉を呼いける所爲と察せられて、女「弱吉さん〳〵。アレサ何樣おしだ。氣をしツかりとお持よ、弱吉さア

ん。トいふ聲聞つけ、座敷の人々大勢一度に駈付て、目を廻したる弱吉を、呼立〳〵介抱する。秀八は弱吉を最初に呼活けて居たる女を見て、秀「ヲヤ梅吉さん。お前今此宅へお出のかへ。此嬢はマア何様したのだネへ。梅「エ、何様したのだか知らないがネ。私が今この厠から出て行合ふと、何をか膽を潰したさうで、アレエ引ト言たツ限、如斯になつてお仕舞のだヨ。秀「ヲヤ〳〵左様かへ。マア何様したンだらうねへ。ト言て居るうち、大勢に介抱をされて弱吉は、漸々に正氣になりしが、四邊を見まはしてまた身をふるはし、よわ「アレまだ梅吉さんの幽靈が其處に居て。トひれ伏ければ、梅「ヲヤそれぢやア私を幽靈だと思つたのかへ。どうせうネへ。ト笑ひ出せば、秀「ア、引、なるほど弱吉さんはまだ梅吉さんの病氣が全快なつた話も、此土地へ越たのも知らないから、幽靈だとお思ひのだネ。ヲホ、、、。新「ハ、アこれは尤だ。此方達も先刻秀八さんに、梅吉さんが蘇生て今に此座へ來て衆人に逢といふ口上を聞ずに居ると、膽を潰す仲間だ。弱吉さんは秀さんの話しの時には、未だ來から知らずに居たによつて、梅吉さんを幽靈だと思つたのだらう。アハ、、、。マア氣が付たから目出たい〳〵。此幸先では梅吉さんの再勤は、ワツトいふ程の大當りだらう。サア〳〵弱吉さんも、强吉さんと名を改て、大丈夫に流行なせへ。サア〳〵早く座敷へ行て、目出度大メに拍掌せう。壽「左様ヨ〳〵。これから梅吉さんの再勤弘めの御酒を頂きやせう。ト衆人一同に笑ひを催ふし、是より秀八は梅吉のことを一座の人人に賴み、猶また壽樂はお祭りの相談を定め、おの〳〵睦ましく其夜は家に歸りしが、程なく梅吉は再勤して、彼幽靈の噂より座敷の招きもいと多く、秀八も彌三郎の金子をもつて自業となり梅吉と組で出るゆゑ、二個の全盛和哥町に並ぶ方なき唄女の板頭と評判よく、彌三郎はお君を家内入ても秀八を粗略にせず。柳吉はお直を家内に居て梅吉を大切にさせ、お直は梅吉の產し小兒を里親の方に置をいたはしく思ひ、少しも早く手元に置たきよしを朝夕に心がける程なれば、一事を以て其實情は推量りても知るべし。さればお時瀧次郎も和合睦しく、凡そ此卷中に記したる男女の身の上には、吉事のみ來りて互に賴母しく往かひ、血脈の親類よりも睦ましき中となり、目出度榮え樂しみけるとぞ。

第六編　全十八卷（大尾）

この八幡がねの一卷は、同じ爲永うしの梅ごよみ北の廓の情緒をよそに、波よる船の情が深かく〳〵と、寄せぼ返さん娼女(こゞも)のさゞめごと、ゴーンと響く八幡鐘。かはい〳〵と浮寢の鳥、作者が言葉やかなづかひ、當て字はこれが身上(しんしやう)のまちがひあつても其儘に、起證せいしと同じこと、假名まちがひは大目に〳〵と、ゴン〳〵言譯ついて云爾

この出版ぬし

東京普及社のあるじ

昭和七年九月二十日印刷
昭和七年九月二十五日發行

定價貳圓

編輯兼發行者　野口常次郎　東京市小石川區江戸川町一番地

印刷者　山本英次郎　東京市小石川江戸川區町一番地

發行所　東京市小石川區江戸川町一　振替東京六二八〇三番　東京普及社

633
6

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black